

平成 27 年度学生生活実態調査報告書（別冊）

－学生生活実態調査報告概要－

九州工業大学

まえがき

本学では、平成27年7月1日を調査基準日とし、学部学生、大学院生、外国人留学生を対象とした「学生生活実態調査」を実施しました。調査の目的は、本学に在学する学生諸君の生活環境等の現状を把握するとともに、修学指導上の基礎資料を得ることにより、今後の福利厚生施策の充実と教育研究環境の改善等に役立てようとするものです。この調査は、アンケート方式により3年ごとに実施されており、今回で第10回目となりました。

調査項目は、生活環境から大学での授業や課外活動、そして日常生活における悩みや進路・就職相談など、広い範囲に及んでいます。特に、授業以外での学習の状況や海外留学、インターンシップ、そしてキャリアセンターや学習支援室についての調査も行いました。また、ハラスメントに関しても踏み込んだ質問項目を設けました。これらは、大学の教育改革の進展とともに、教える・教わるといった形態から、自ら学ぶ・考えるといった主体的学習に重点が移ることと、グローバル化の視点を持つことが必要であり、さらには人間関係やメンタルヘルスの面で、その実態を捉えておくべきと考えることによります。

アンケート調査の集計結果は、その全ての内容を平成27年12月に学内向けのホームページ上に調査報告書として公表しております。また前回より調査結果の概要をわかりやすく紹介することが好ましいと判断し、調査報告書（別冊）としてこの「学生生活実態調査報告概要」を作成しました。調査報告書とともに今後の大学教育の改善・充実に役立つものと考えております。

最後に、調査に協力いただいた多くの学生諸君に、この場を借りてお礼申し上げます。

九州工業大学学生委員会 委員長
理事・副学長（教育・学生担当）

鶴田 隆治

目 次

A. 調査を依頼した人たち	1
B. 住居と通学	1
C. 食事	3
D. 経済状況, 経済支援	4
E. 学生生活	9
F. 学習状況, 学習支援	11
G. 課外活動 (日本人学生)	15
H. 留学	16
I. ボランティア活動	18
J. 自主的活動支援	19
K. 悩み, 健康等	20
L. 進路, 就職支援	23
M. 危機管理支援	27
N. おわりに	28

A. 調査を依頼した人たち

回収率は 69%

九州工業大学に在籍する学生諸君の生活環境等の現状を把握し、今後の福利厚生施策の充実、教育研究環境の改善等に役立てるため、本学の学部学生、大学院生、外国人留学生を対象に「学生生活実態調査」を実施しました。

この調査は3年に1度実施しているもので、平成27年度は7月1日を基準日として調査を実施したところ、3,924人から回答があり、回収率は69%でした。

調査にあたって、回答にご協力いただいた学生の皆さんに感謝いたします。

回答者の内訳

		対象学生数	回収数	回収率
		人	人	%
学部	工学部	2,290	1,505	65.7
	情報工学部	1,807	1,033	57.2
学部計		4,097	2,539	62.0
大学院	工学府	606	536	88.4
	情報工学府	414	366	88.4
	生命体工学研究科	357	311	87.1
大学院計		1,377	1,213	88.1
外国人留学生		215	172	80.0
合計		5,689	3,924	69.0

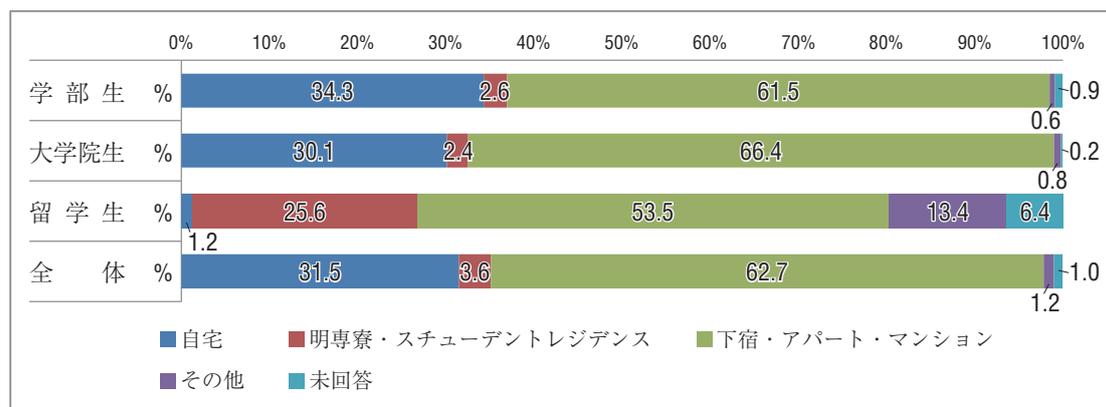
B. 住居と通学

■住居について

32%が自宅生、留学生も含め50%以上がアパート等の自宅外生

住居区分が自宅の割合は、学部生で34%、大学院生で30%、下宿・アパート・マンションの割合は、学部生で62%、大学院生で66%であった。前回調査時の平成24年度と比べると、自宅外生の割合は、学部生で4%、大学院生で2%増加している。留学生については、居住区分が明専寮・スチューデントレジデンスの大学関係の施設の割合が26%、下宿・アパート・マンションの割合は54%であった。前回調査時と比べると、大学関係の施設の割合は20%程度減少、一方で下宿・アパート・マンションの割合は1%増加している。

現在の住居区分



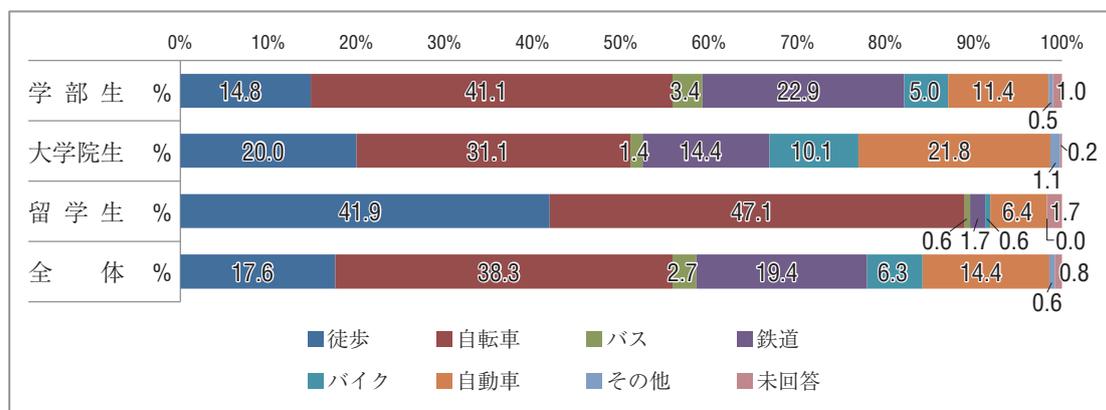
■通学について

自転車の利用が38%と最も多い

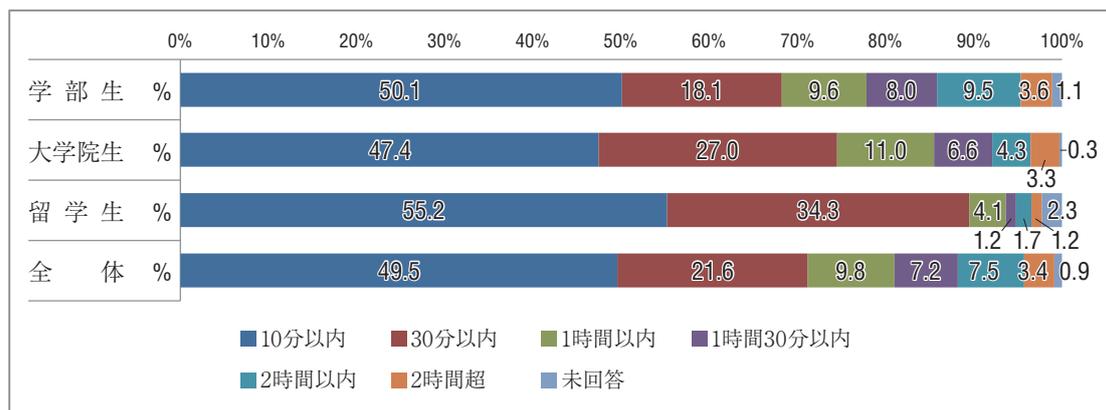
通学手段として自転車を利用しているのは学部生が41%、大学院生が31%、留学生が47%といずれも割合が最も高かった。学部生については15%が徒歩で通学しており、自転車と合わせて56%となる。大学院生については徒歩と自転車の合計が51%となる一方、21%と約4人に1人が自動車で通学し、バイクと合わせると32%となる。留学生については徒歩42%、自転車47%で、合計が約90%となる。留学生の大半は大学近辺に住居を確保できていることが分かる。

通学時間については、10分以内が学部生で50%、大学院生で47%、留学生は55%となっている。30分以内まで含めると学部生は68%、大学院生は74%、留学生は90%と、かなり高い割合となっている。一方、1時間以上の通学時間を要する学生も学部生で21%、大学院生で14%居り、また、留学生にも1時間半以上の通学時間を要する学生が5%居ることがわかる。

通学手段



通学時間



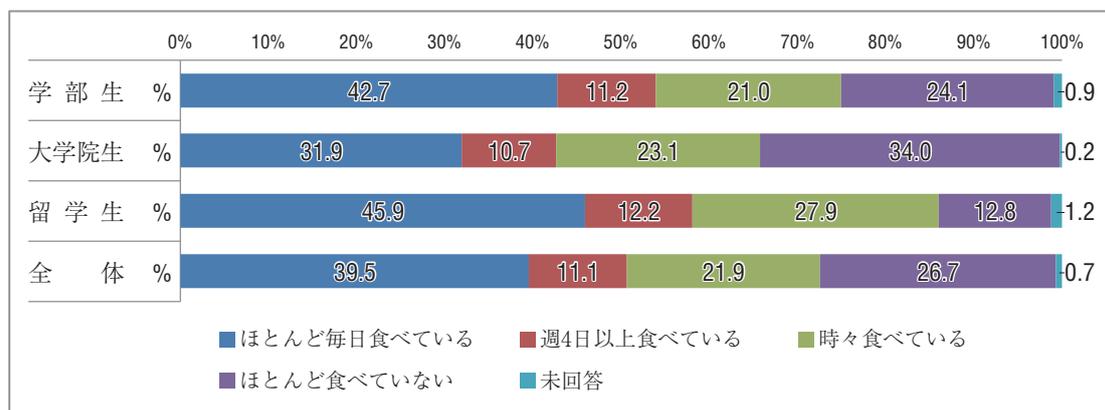
C. 食事

■朝食について

約半数が朝食を食べている

朝食を「週4日以上食べている」学生の割合は、学部生・留学生では50%を超えているが、大学院生では43%と半数を切っている。また、留学生の「時々食べている」以上の割合が前回調査時の81%に比べ上昇しているが、学部生及び大学院生はほぼ変化がない。

朝食を食べていますか

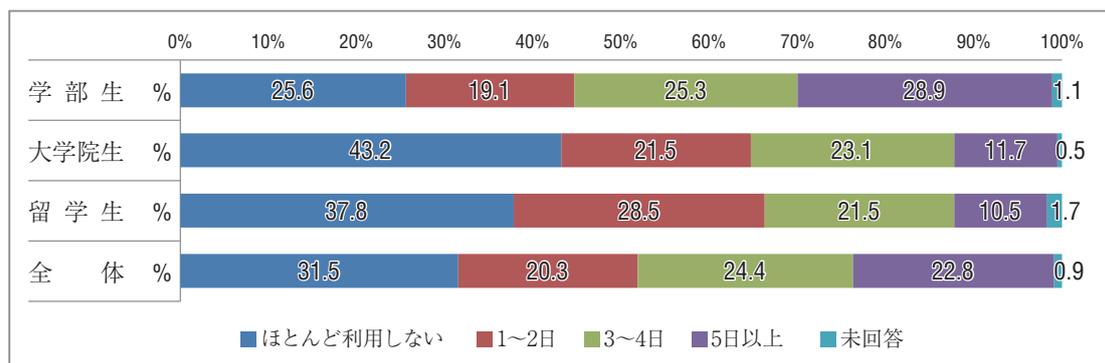


■学内食堂の利用について

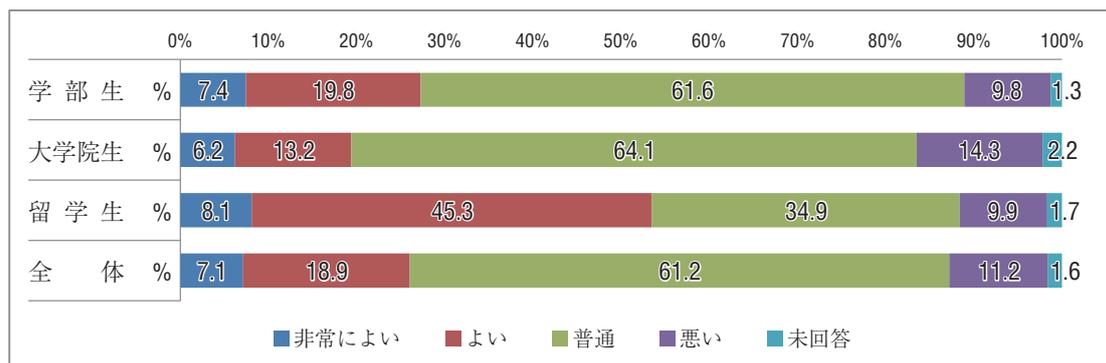
週1日以上利用する割合は67%以上と高く、評価も普通以上

学内食堂を週1日以上利用している割合は、学部生で73%、大学院生で56%、留学生で61%と高くなっている。利用頻度は前回調査時と比べてもほぼ変化がない。評価については普通以上の回答が約90%以上を占め、概ね満足しているが、反面改善すべき点としては混雑の解消と低価格化への要望が約半数を占め、前回調査時同様の結果となった。

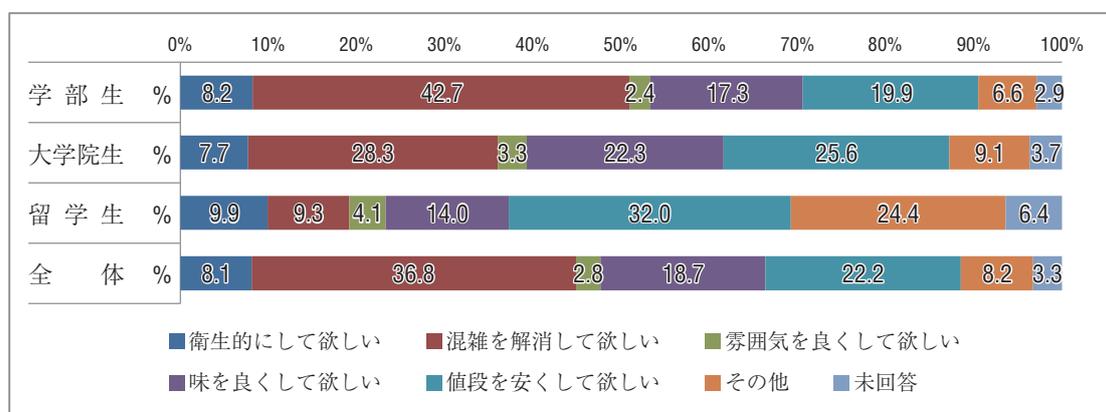
利用頻度



評価



改善すべき点



D. 経済状況、経済支援

■収入について

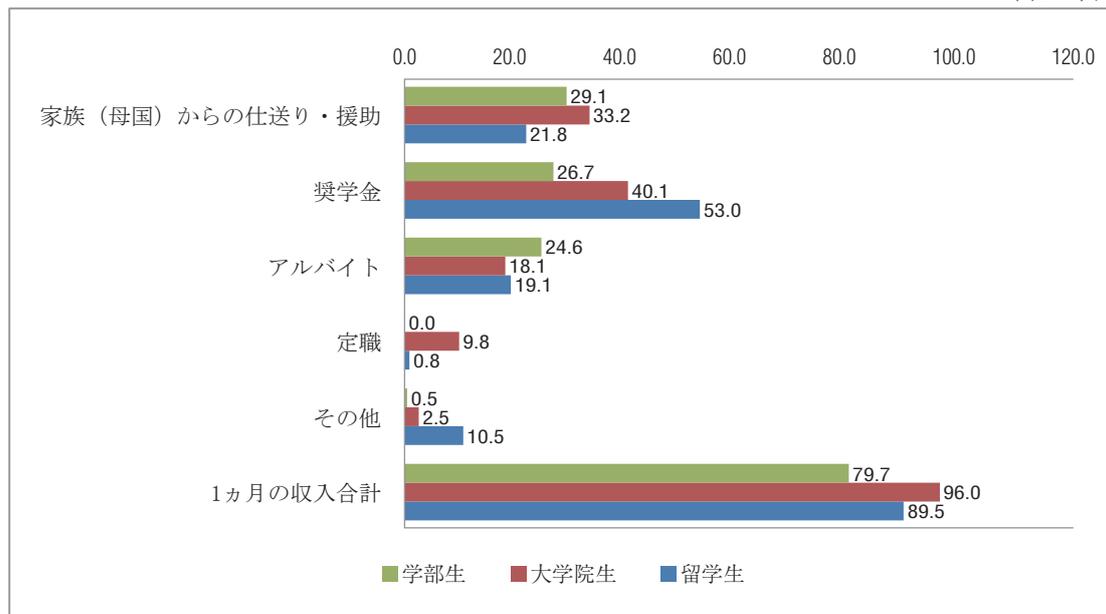
奨学金収入は、学部生 33%、院生 41%、留学生 60%。留学生は娯楽よりも修学費に多く支出している。

1ヶ月の平均収入を見ると、学部生、留学生、大学院生の順に多くなる傾向にあるが、平均支出になると、学部生、大学院生、留学生の順となっている。日本人学生は収入の範囲内で支出が行われているが、留学生は支出が収入を上回っており、これは、日本人学生に比べると食費、住居・光熱費の支出が多くなっており、苦しい経済事情が浮き彫りとなった。収入に占める奨学金の割合は、学部生が33%、大学院生が41%、留学生が60%と留学生の奨学金に対する支援の必要性が最も高くなっている。収入の大部分は、家族等からの仕送り、奨学金、アルバイト収入で賄われている。

一方、支出については、1ヶ月平均支出の約60%が食費、住居・光熱費となっている。日本人学生は修学費よりも娯楽費に対する支出が高く、留学生では、娯楽費よりも修学費に対する支出が高くなっている。家庭の年間収入額は、学部生と大学院生では大差なく、「401万円～600万円」と回答した学生が約20%程度、続いて「601万円～800万円」、「201万円～400万円」となっており、「200万円未満」と回答した学生も約10%いる。また、留学生では、62%が「200万円未満」、18%が「201万円～400万円」となっており、日本人学生、留学生を問わず、経済的に厳しい状況にある。

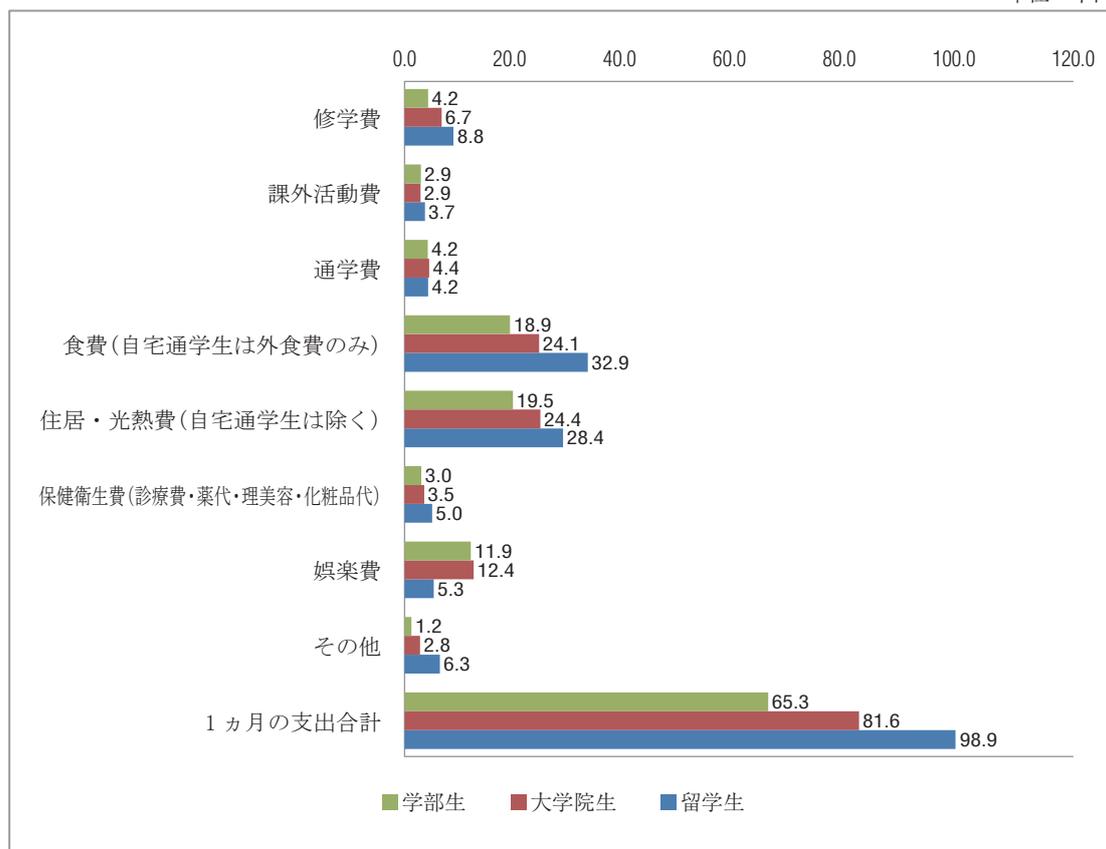
収 入

単位：千円

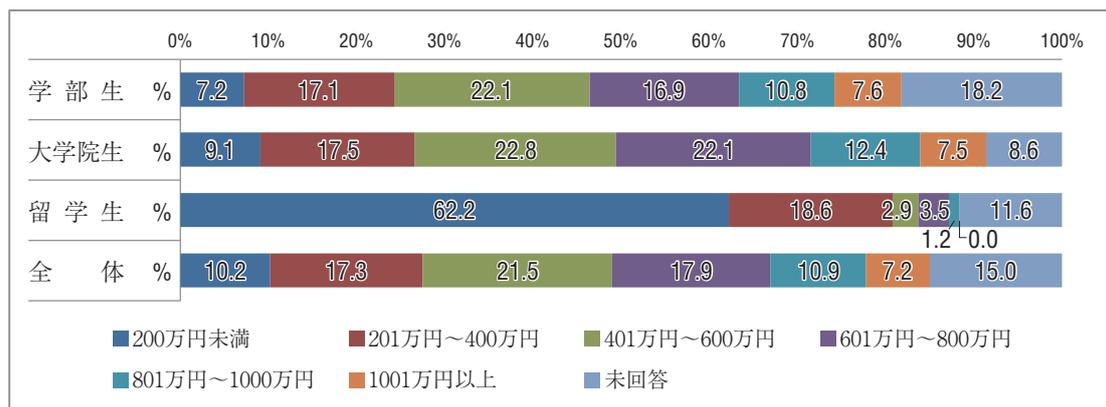


支 出

単位：千円



家庭の年間収入額



■ アルバイトについて

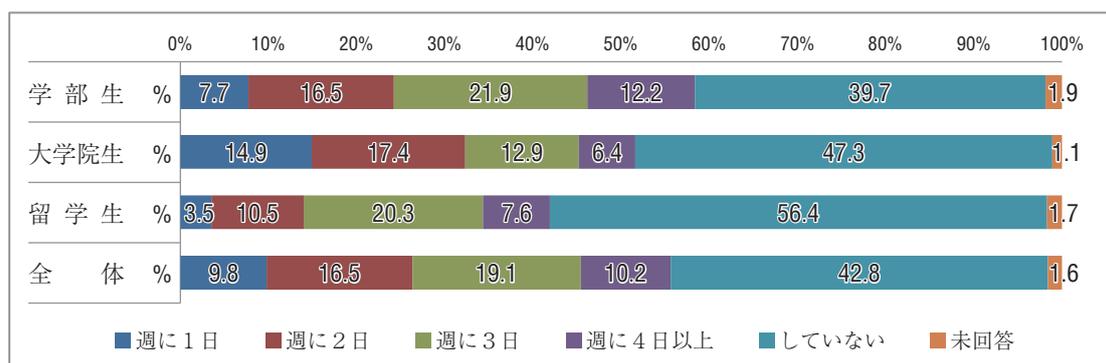
約半数の学生がアルバイトをしているが、その目的は様々

全体では50%以上の学生が、留学生では42%の学生がアルバイトを行っている。アルバイトの頻度については、週に2日～3日が多数を占めており、週4日以上は1割程度である。週4日以上アルバイトを行う学部生の割合は、大学院生及び留学生に比べ2倍程度となっている。アルバイトを行う主な理由は、留学生については学費・生活費を稼ぐ為が主となっている。一方で、学部・大学院生は、学費・生活費に加え、旅行・娯楽費を稼ぐ為となっている。

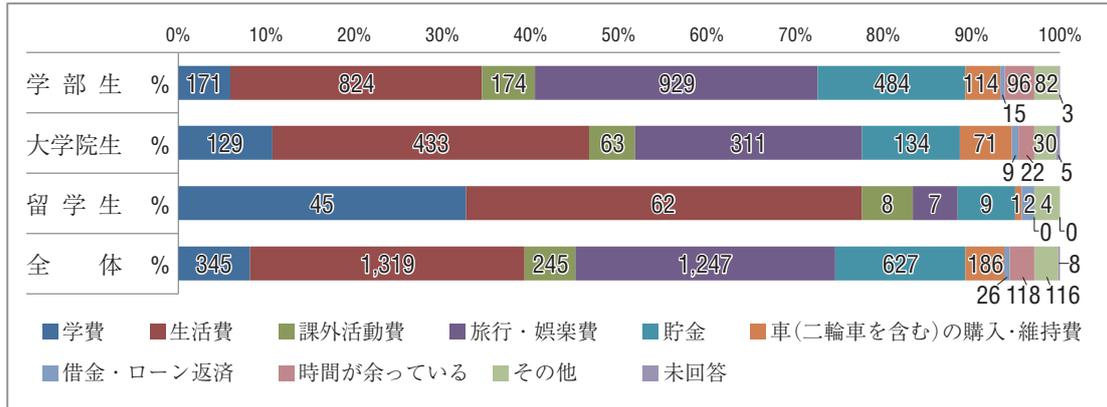
アルバイトの職種については、学生区分に依らず、販売・サービス業と肉体軽労働（ウェ이터・ウェイトレス・皿洗い等）とで半分以上となっている。大学院生の場合には塾講師が13%となっており、学部生や留学生の3%より高い値を示している。

約60%の学生はアルバイトが「学業の妨げになっていない」と回答しているが、残りの約40%の学生は何らかの支障を感じている。

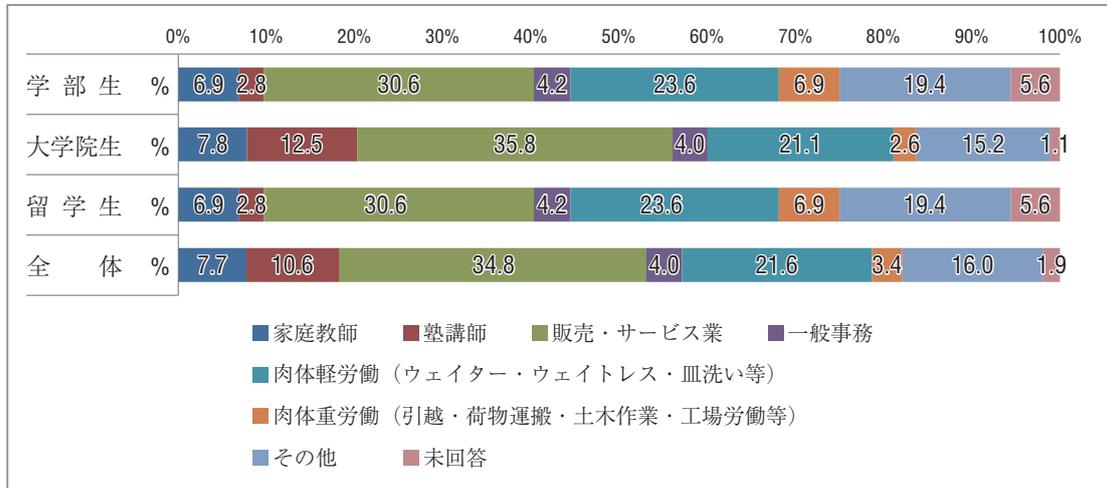
アルバイトの回数



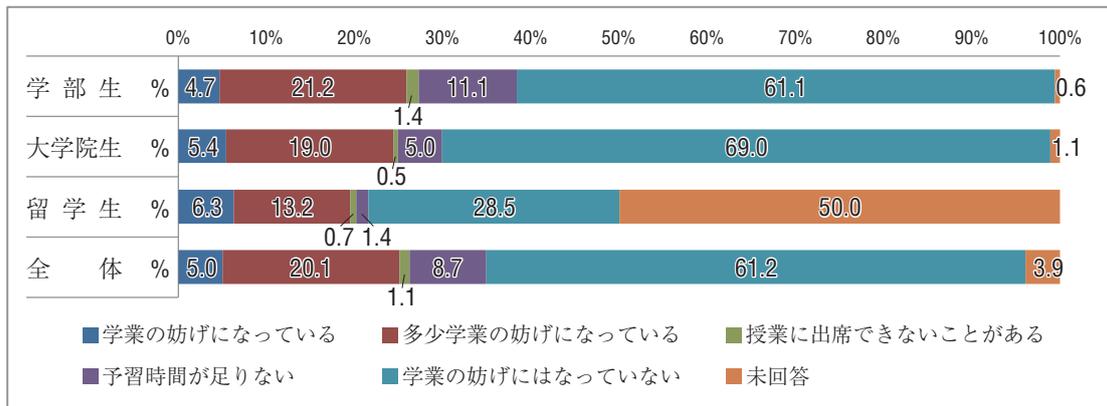
アルバイトをする理由



アルバイトの種類



アルバイトと学業の関係

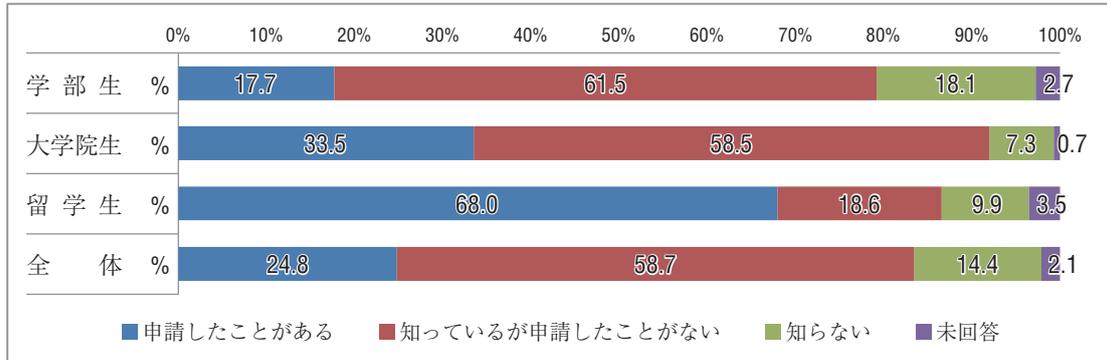


■入学料・授業料免除について

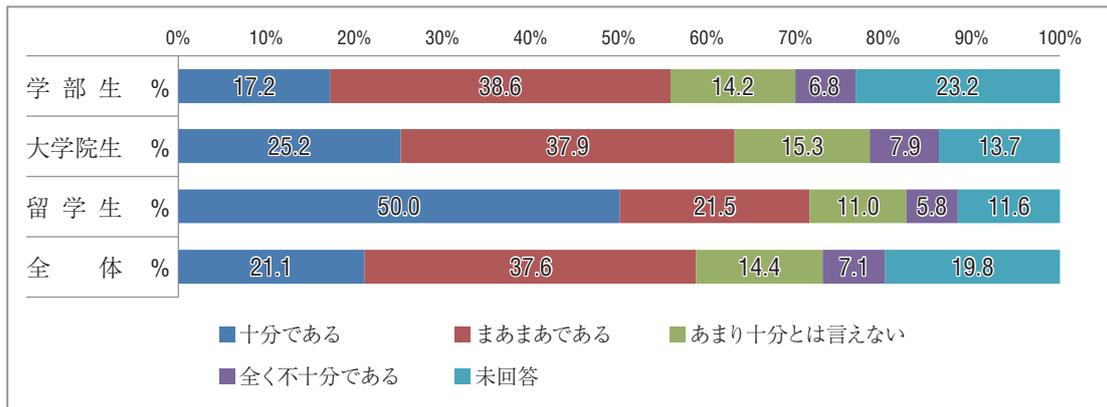
免除制度の認知度は高く、満足度も高い

「制度を知らない」と回答した学生が14%ほど存在している。「知っているが申請したことがない」と回答した学生は学部生、大学院生は約60%、留学生では約18%である。申請した学生のうち約60%は「十分である」、「まあまあである」、と回答しており、充実していると思われる。

制度の認知度



制度の満足度

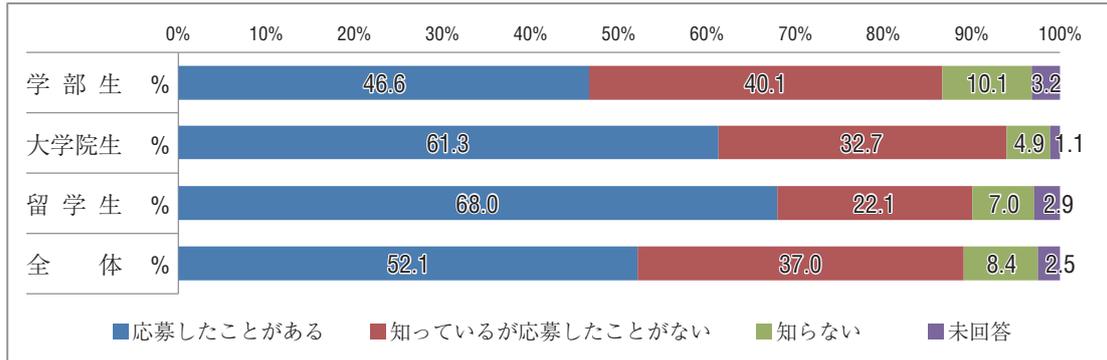


■各種奨学金について

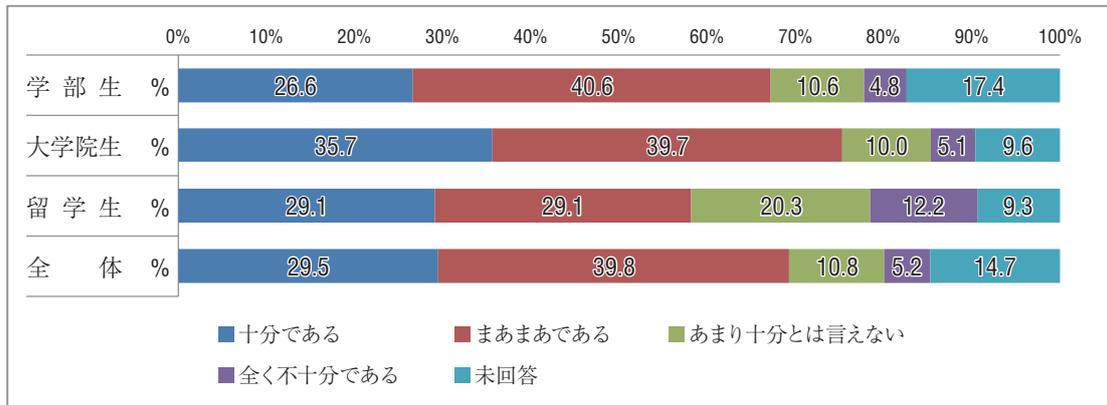
奨学金の認知度は非常に高く、満足度も高い

「応募したことがある」、「知っているが応募したことがない」と回答した学生は約90%であり、学生への認知度は非常に高いことが分かる。一方、学部生の約10%の学生は「知らない」と回答しており、大学院生及び留学生より認知度が低くなっている。また、約70%の学生が制度に満足しており、満足度が高い事が伺える。しかしながら、留学生の満足度は約60%であり、日本人学生より低くなっている。

認知度



満足度



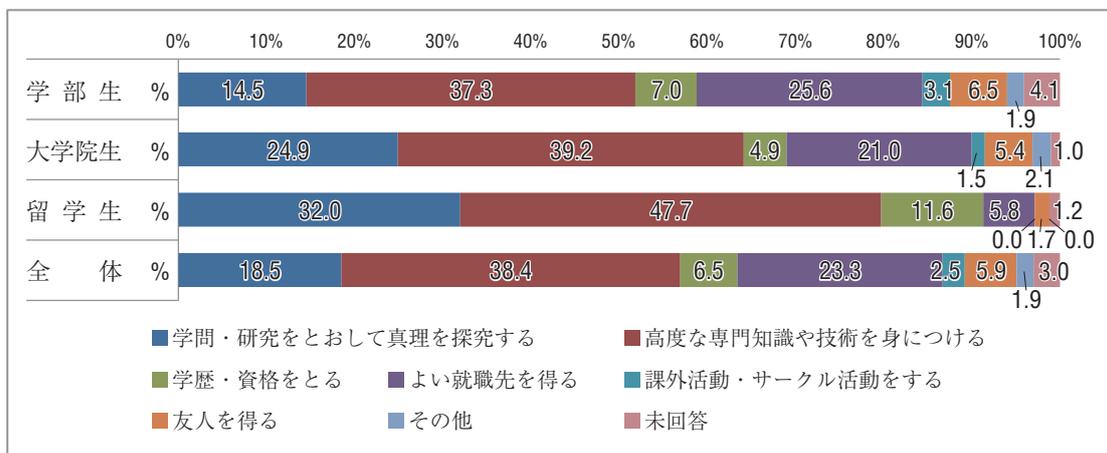
E. 学生生活

■ 学生生活の一番の目的

一番の目的は「高度な専門知識や技術を身につける」こと

「高度な専門知識や技術を身につける」事が最も高い。続いて「よい就職先を得る」となっているが、留学生では「学問・研究をとおして真理を探究する」となっており、日本人学生とは違った目的を持っている。

学生生活の一番の目的

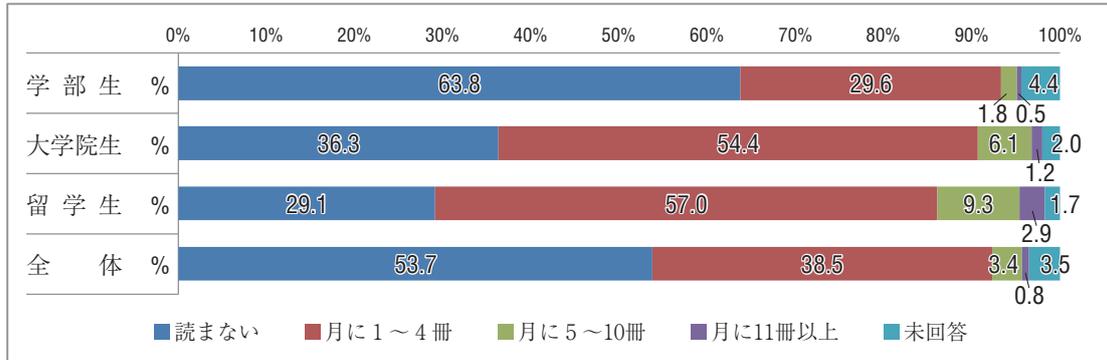


■読書について

大学院生、留学生の読書量が多い

学部生に比べると大学院生の方がより多くの本を読んでいる。留学生は日本人学生と比べるとより多くの本を読んでいることが分かる。学部生では「読まない」と回答した割合が約60%であり、大学院生及び留学生と比べると約2倍近くの割合となっている。

専門書・専門雑誌

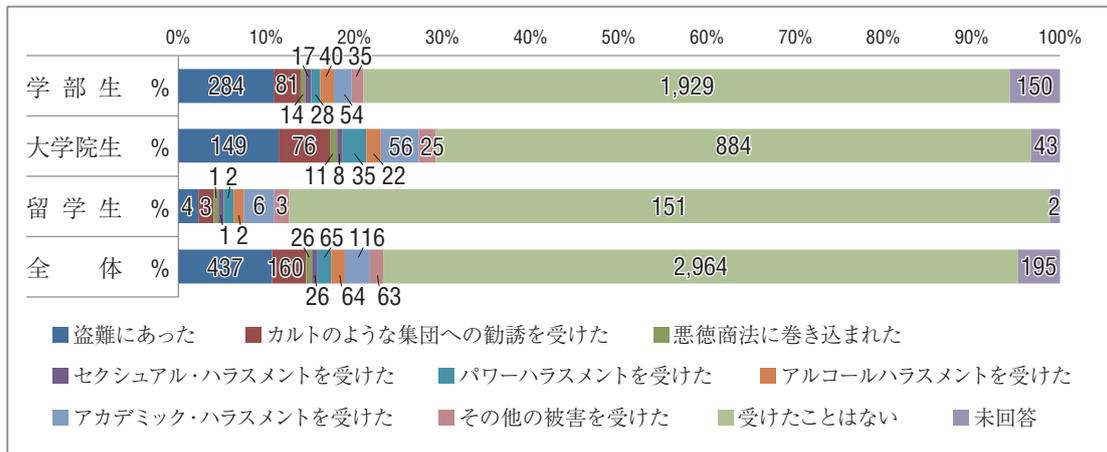


■犯罪被害や迷惑行為について

犯罪被害等はほぼ皆無

盗難の被害にあった学生が若干名いるが、ほとんどの学生は犯罪被害や迷惑行為を受けたことがない。

犯罪被害や迷惑行為を受けたことがあるか

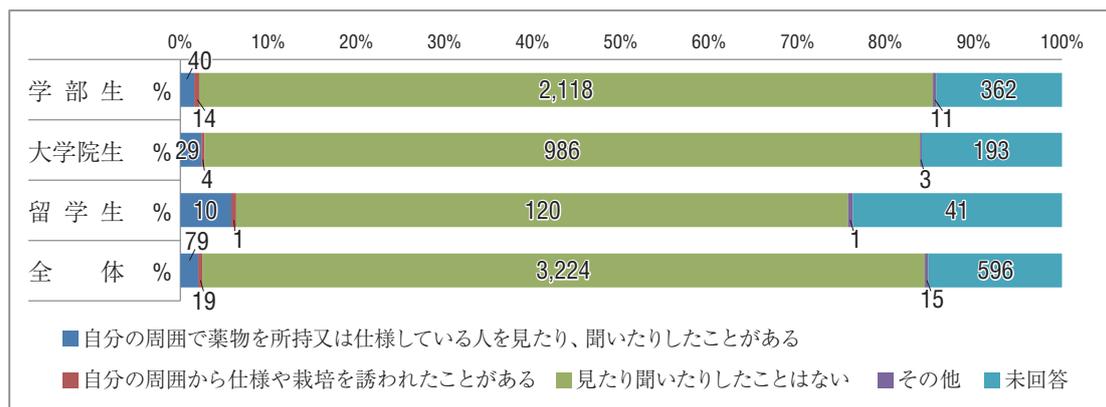


■薬物について

薬物の使用は皆無

ほとんどの学生は薬物について「見たり聞いたりしたことはない」と回答している。一方で、見たり聞いたりしたことがある、周囲から誘われたことがあると少数が回答している。薬物の使用を防ぐためにも、引き続き啓発活動を行う必要がある。

薬物について



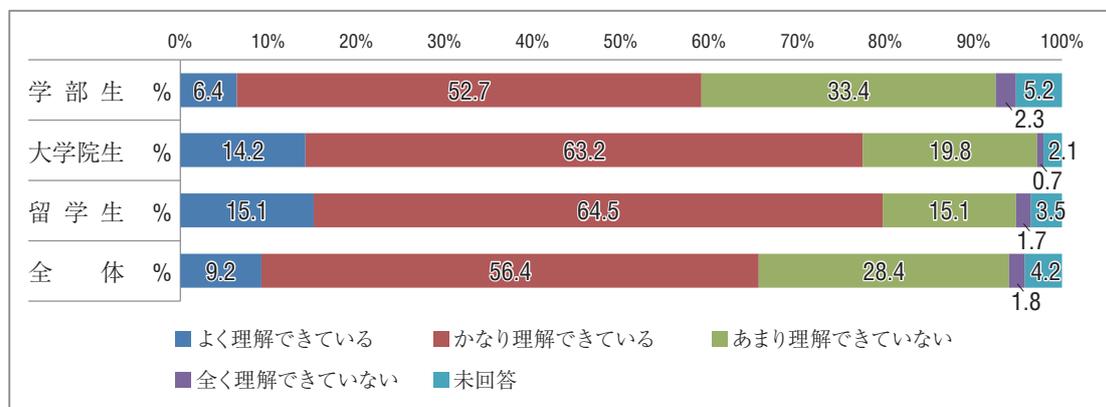
F. 学習状況, 学習支援

■授業について

大学院生と留学生の理解度は高いが、学部生の理解度は60%程度

授業の理解度は高く、概ね理解出来ていることが分かる。大学院生及び留学生は「よく理解できている」、「かなり理解できている」と回答した割合が約80%弱となっているが、学部生は約60%弱となっており、大学院生及び留学生と比べると授業内容をあまり理解できていないことが分かる。

授業の理解度

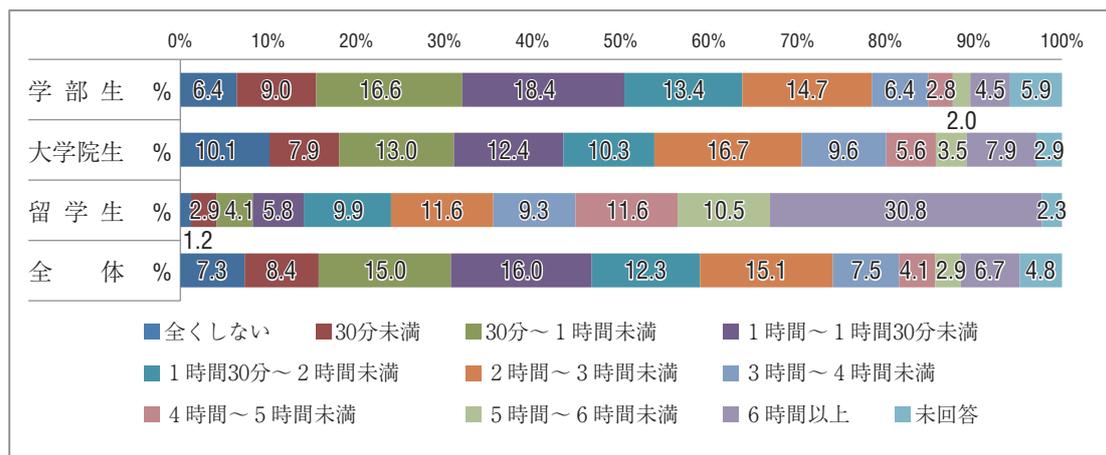


■勉強時間について

勉強時間にはばつきはあるが、多くの学生は何らかの勉強をしている

授業時間以外に、予習、復習、課題、レポート作成等で1日平均どれくらい勉強しているかについて、「全く勉強しない」と回答した割合は、学部生で6%、大学院生で10%、留学生で1%であった。また、もっとも割合の高い勉強時間区分は、学部生で「1時間～1時間30分未満」(18%)、大学院生で「2時間～3時間未満」(17%)、留学生で「6時間以上」(31%)であった。

授業に関することの1日の勉強時間



■授業・履修に関する支援について

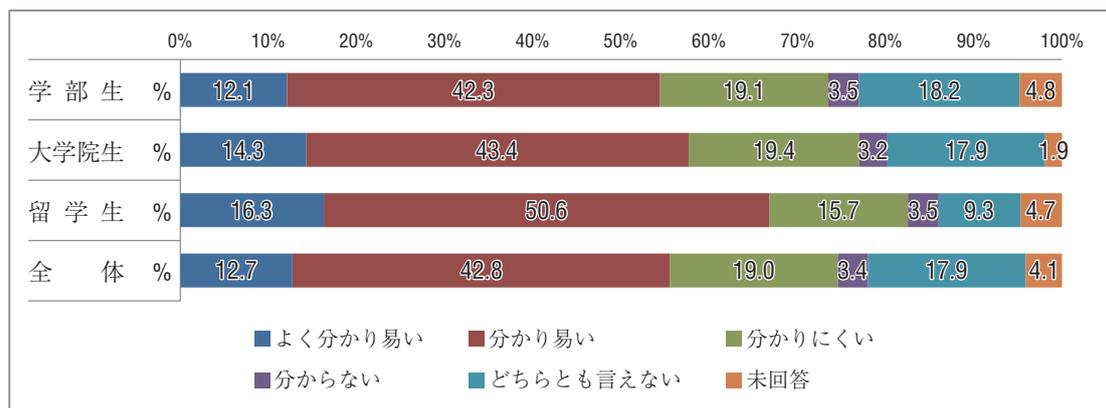
ガイダンス等は分かりやすく、学習自己評価システムと学習支援サービスについても活用されている

半数以上の学生が、授業・履修に関するガイダンスやオリエンテーションなどを分かりやすいと感じている。一方で、約20%程度の学生が、分かりにくい、分からないと答えている。

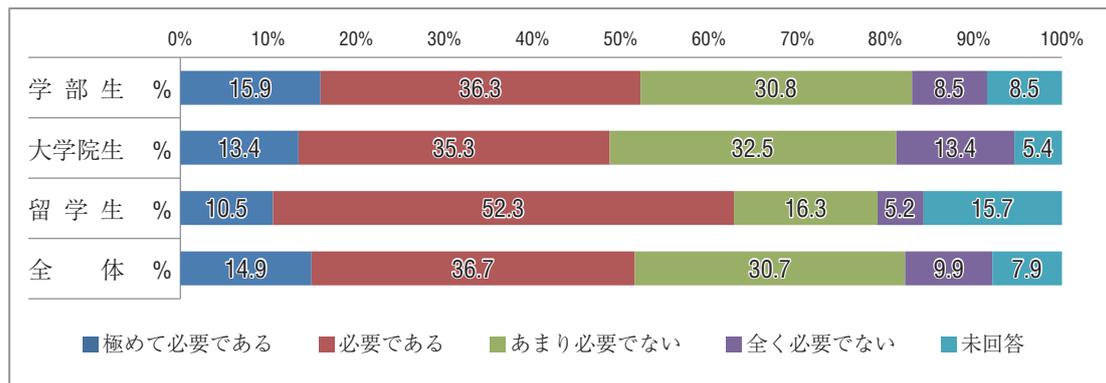
また、学修自己評価システムによる学修支援については、50%強の学生が必要であると答え、約60%の学生が満足している。今後、活用方法をさらに周知するとともに満足度を上げる工夫が期待される。

Moodle（学習支援サービス）による講義に関する学修支援については、約70%程度の学生が必要を感じ、満足している。満足度を上げる継続的な取り組みが期待される。

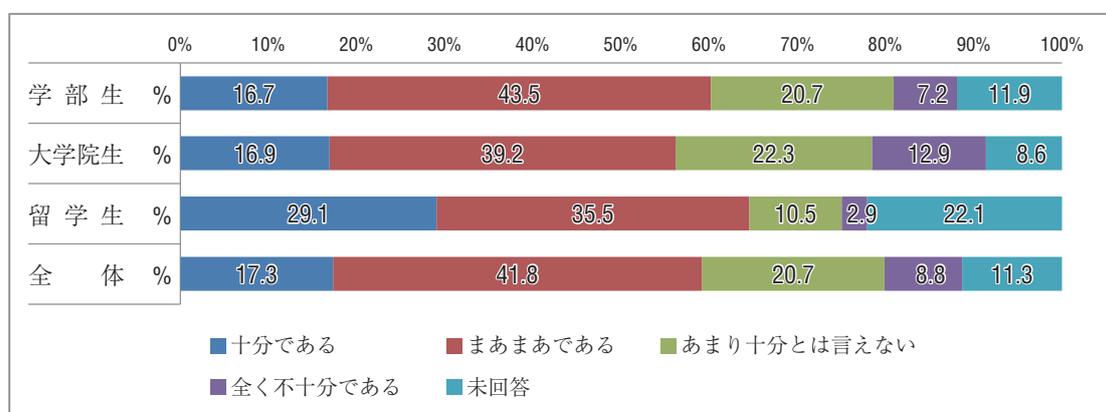
授業・履修に関するガイダンスやオリエンテーションなどのわかりやすさ



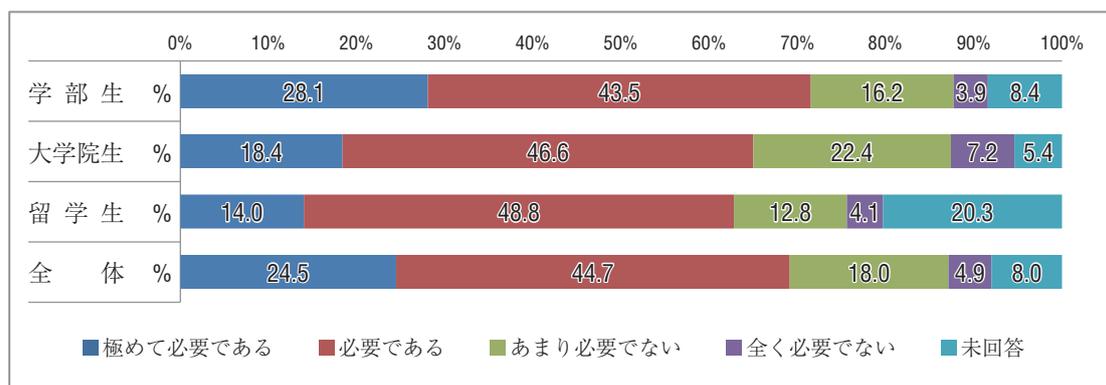
学修自己評価システムによる学修支援の必要性



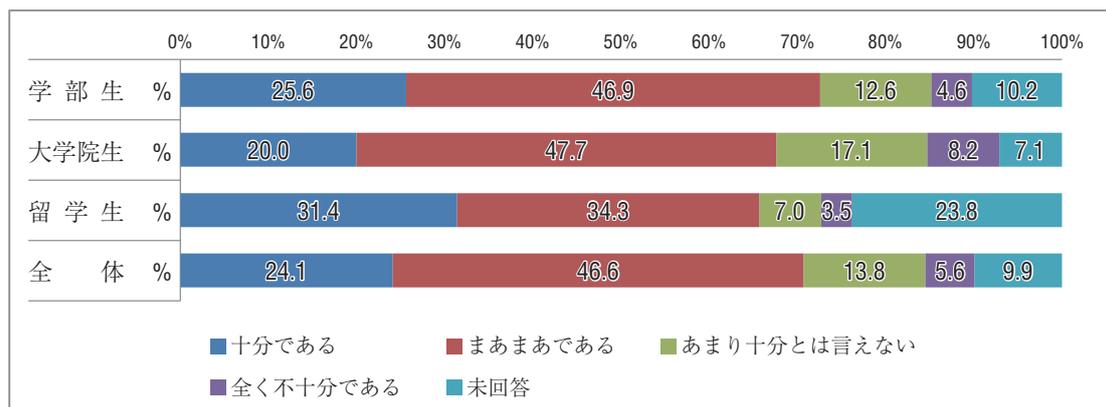
学修自己評価システムによる学修支援の満足度・充実度



Moodle（学習支援サービス）による講義に関する学修支援の必要性



Moodle（学習支援サービス）による講義に関する学修支援の満足度・充実度

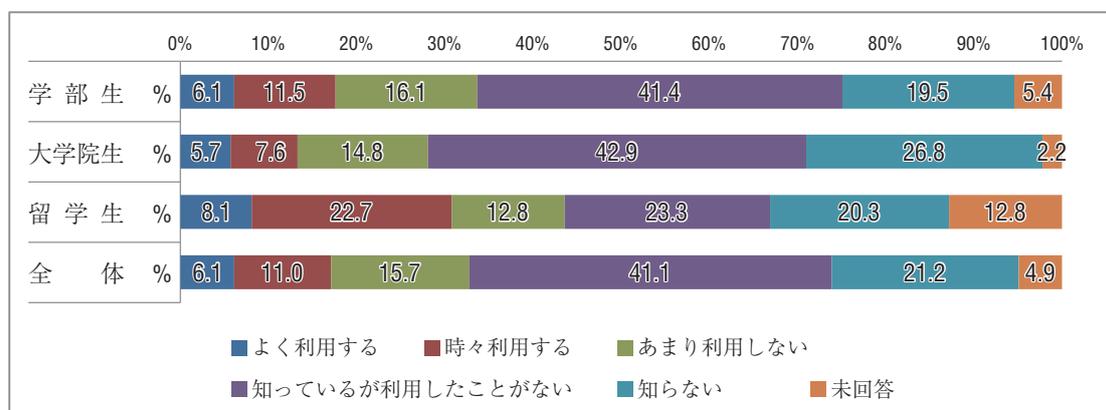


■学習支援室等の利用について

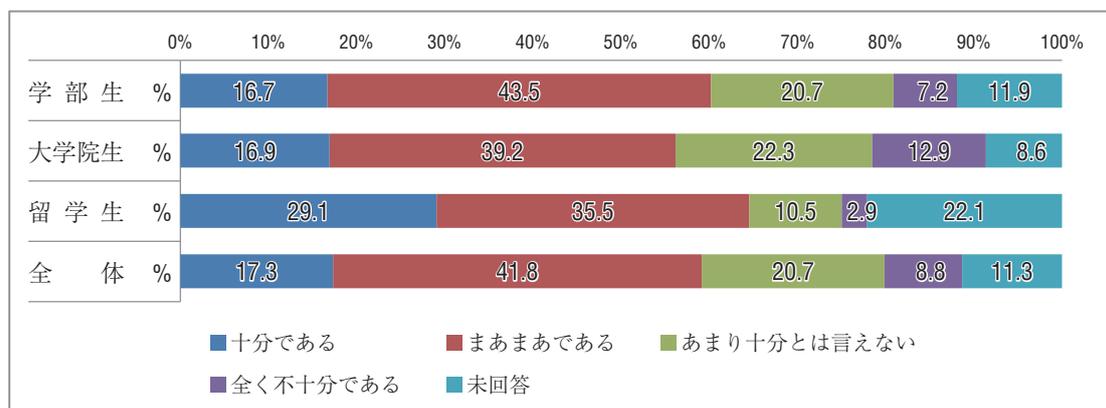
利用頻度は低いが必要性は高い

学修支援室は75%程度の学生が知っており、認知度は高いことがわかった。「よく利用する」と「時々利用する」学生は、20%弱程度となっている。一方、全体で58%の学生が必要であると回答しており、満足度も「十分である」もしくは「まあまあである」と回答している学生が60%となっている。

学習支援室（情報工学部では学習コンシェルジュ・ステーション）の利用頻度



満足度・充実度



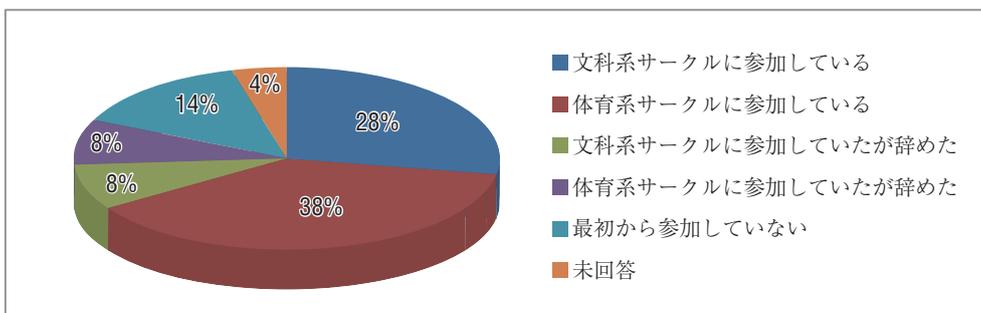
G. 課外活動（日本人学生）

■サークル活動について（学部生のみ回答）

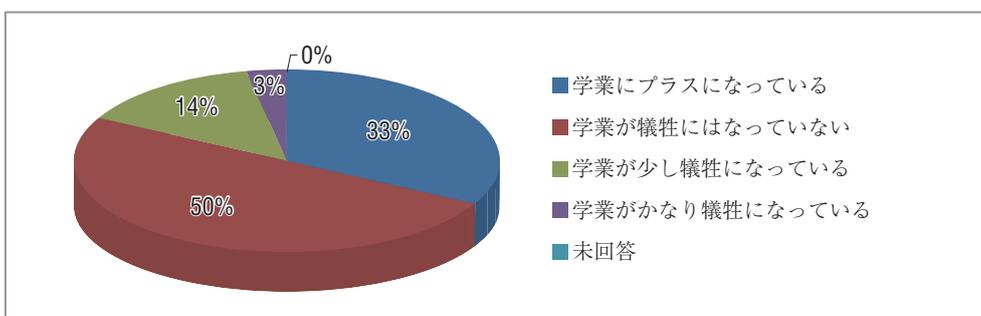
サークル活動は学業にも良い影響をもたらす

工学部には13団体の文化系サークル、29団体の体育系サークル、31団体の同好会があり、情報工学部には、14団体の文化系サークル、19団体の体育系サークル、27団体の同好会がある。何らかのサークルに参加している学生は、66%であり加入率は高く、積極的に課外活動に参加していることが分かる。学業との関係については、学業にプラスになっていると感じている学生が33%おり、また、学業が犠牲になってはいないと感じる学生と合わせると、83%の学生はサークル活動と学業のバランスを取っていることが分かる。また、加入動機を見ると、趣味と一致していると回答した学生の割合が30%と最も高く、自分のやりたいことをやっている学生が多いので加入率も必然的に高くなっているものと思われる。続いて、「友人が欲しい」が16%、「何かおもいっきりやってみたい」が13%であり、大学生活においてサークル活動が人間形成にとって有益であることも認識されていることがわかる。

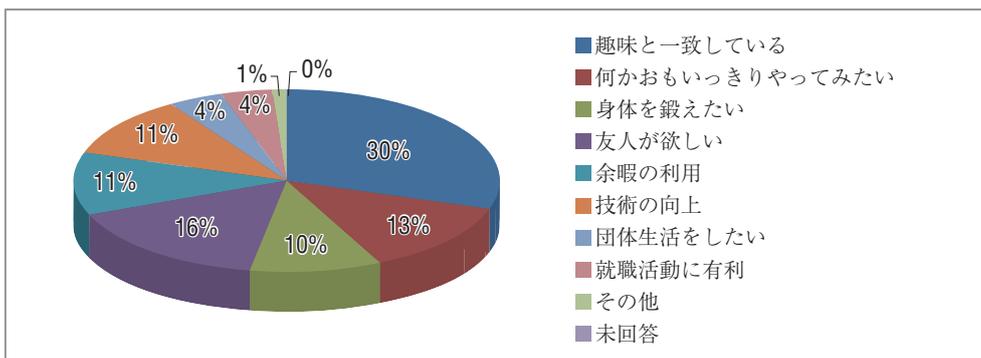
サークルに参加していますか



学業との関係



加入動機



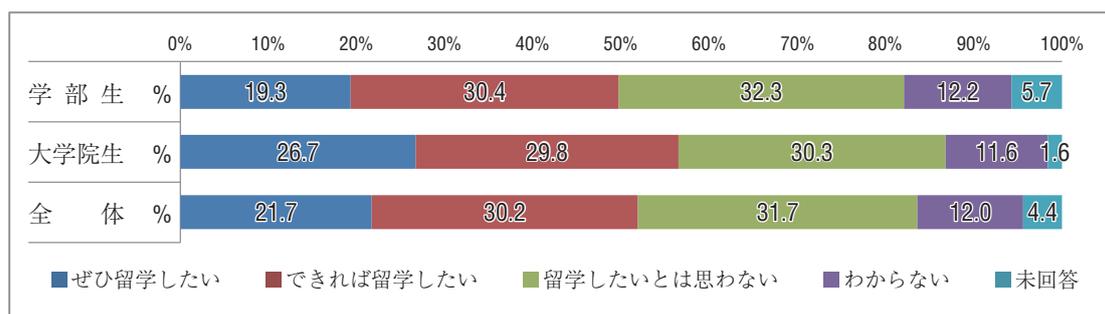
H. 留学

■海外留学について（日本人学生）

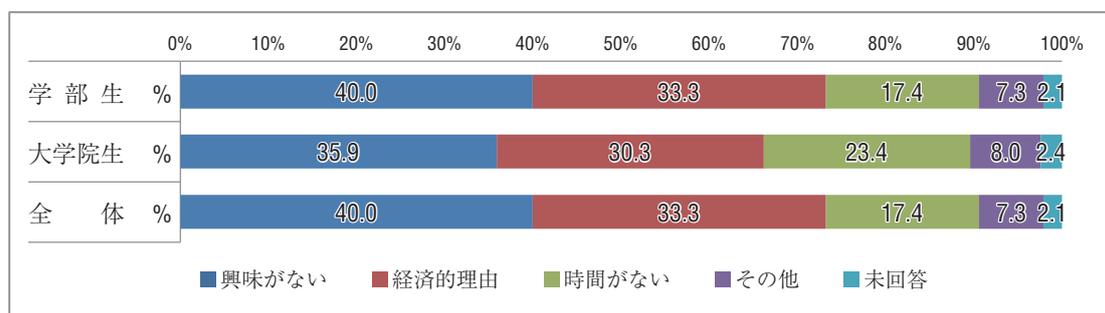
留学したい学生は約半数も、意識は分かれている

「ぜひ留学したい」と「できれば留学したい」を合わせれば、52%となっており、前回調査時に比べると7ポイント程度上昇していることから意識の高さが伺える。一方、「留学したいとは思わない」学生も32%おり、その理由として、「興味がない」（40%）に続き、「経済的理由」（33%）、「時間がない」（17%）となっており、留学の意義やメリットをさらに伝えるとともに、経済的な支援についてもさらに検討する必要があることがわかった。

海外留学の希望



（「留学したいとは思わない」との回答者について）海外留学を考える際の不安

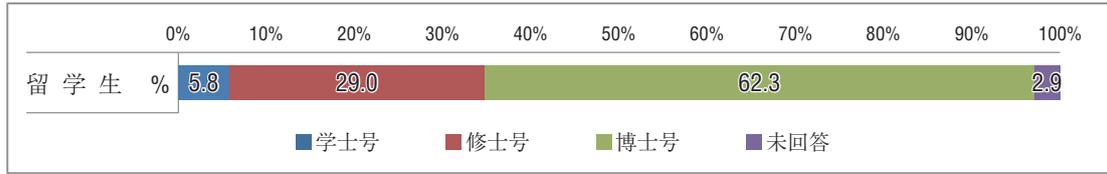


■日本留学について（外国人留学生）

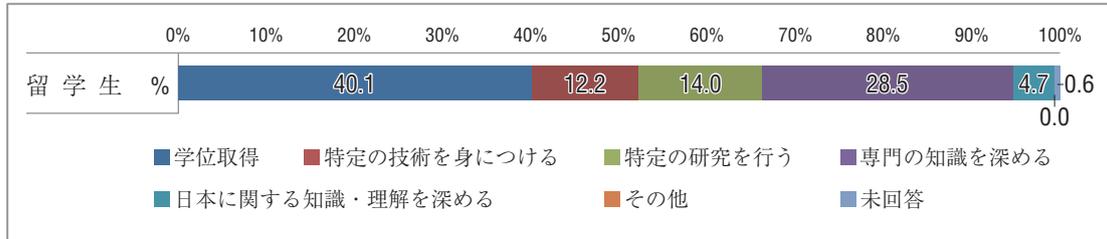
現状に満足するも、機会があれば外国にも目を向けている

日本に留学した目的としては、「学位取得」（40%）が最も多く、続いて「専門の知識を深める」（29%）、「特定の研究を行う」（12%）と回答している。本学を留学先に選んだ理由の一番として「学問・研究の水準が高い」（31%）ことを挙げており、高い評価を得られていることが分かる。また、日本以外の国に留学してみたいかの問いについては、約80%の学生が、チャンスがあれば留学したいと思っている。一方で、留学したいとは思わないと回答した学生のうち、約35%の学生が経済的な理由を挙げており、留学生の経済事情があまりよくないものと思われる。

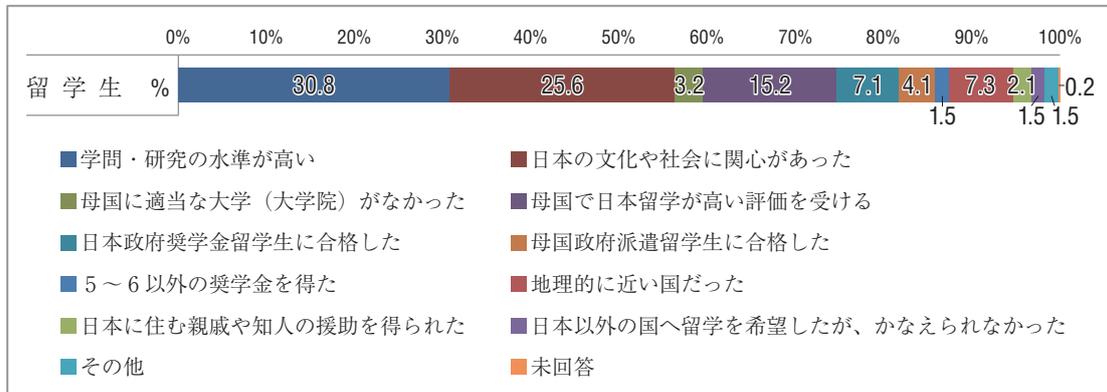
取得したい学位



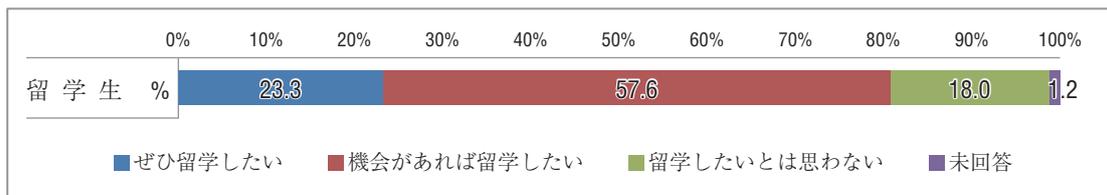
日本留学の目的



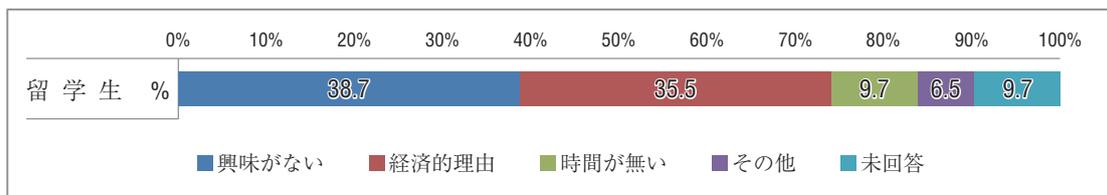
本学を留学先に選んだ理由



日本以外の国に留学してみたいか



(「留学したいとは思わない」との回答者について) 留学したいとは思わない理由



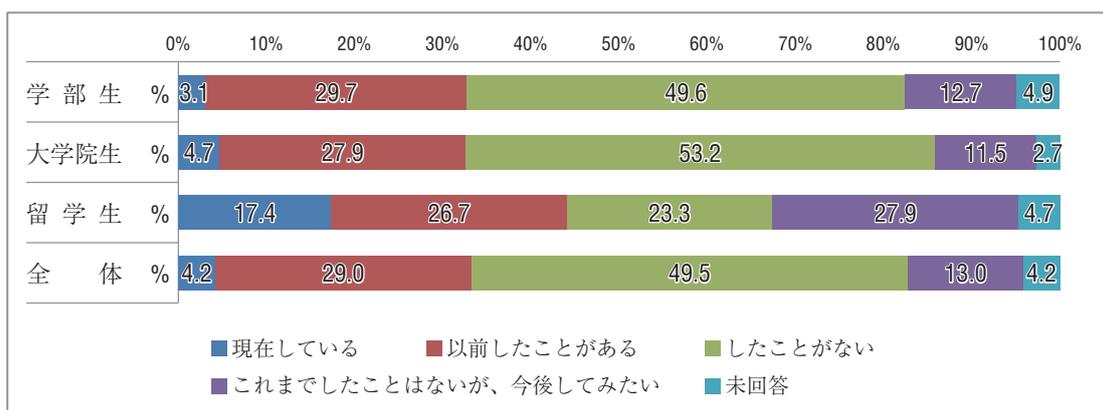
1. ボランティア活動

■ボランティア活動について

ボランティアの経験は少ないが約半数が興味を持っている

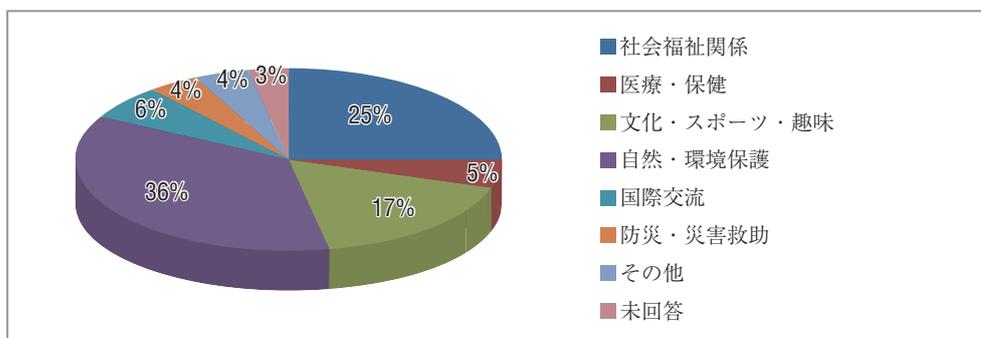
全体的には33%の学生はボランティア経験があるが、63%の学生はボランティア経験がないことが分かる。しかし、今後やりたい学生を加えると約半数の学生がボランティア活動に興味をもっていることが分かる。留学生は日本人学生と比べるとボランティアに対する意識が高く、約70%の学生がボランティア活動に興味を示していることが分かる。ボランティア活動の内容については、全体では「自然・環境保護」が一番多いこと、留学生では「国際交流」が圧倒的に多いことが特徴的である。

ボランティア活動の経験の有無

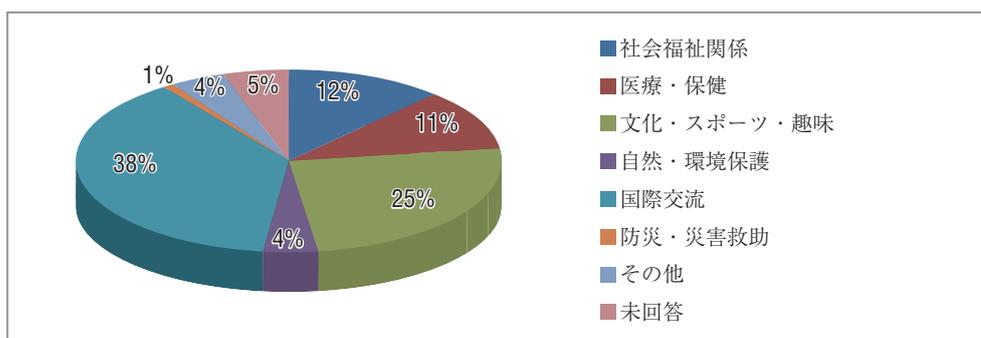


ボランティア活動の内容（ボランティア活動をしているまたはしたことがある人のみ）

全体



留学生



J. 自主的活動支援

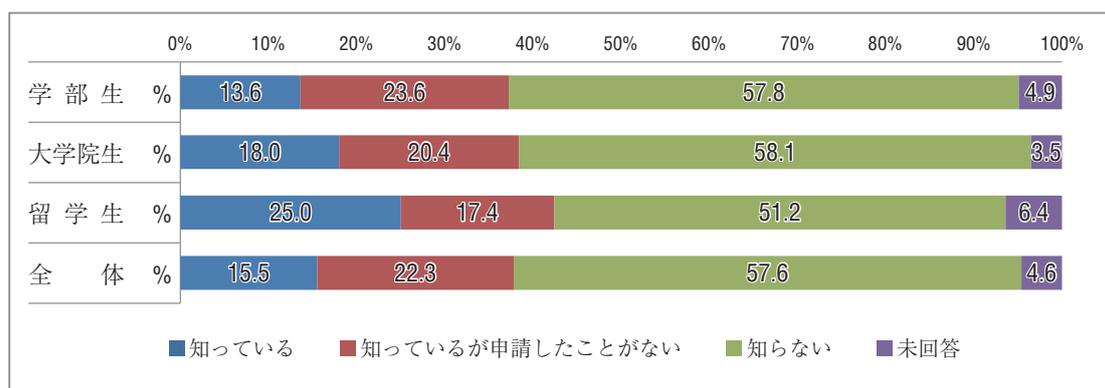
■自主的活動支援について

「学生プロジェクト」は学生周知が必要

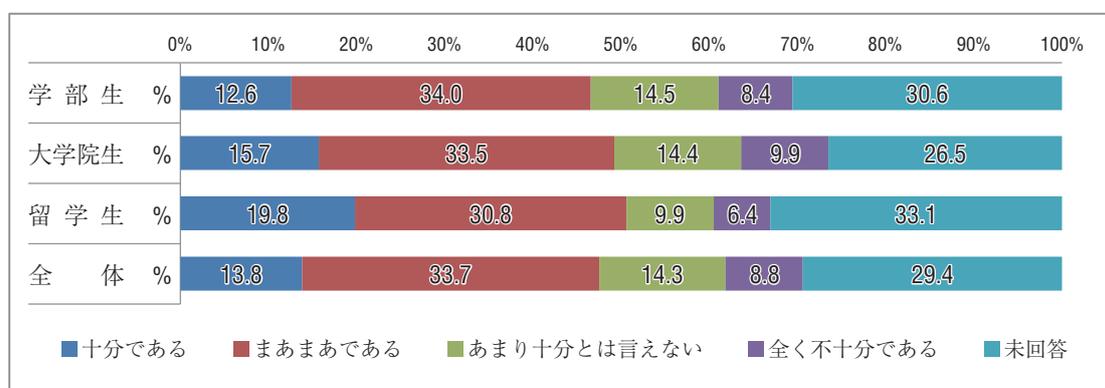
ロボットコンテスト等の技術系競技会参加や地域活性化プロジェクト等の地域貢献活動を目指す学生グループに対して1団体200万円を限度として活動経費を支援している学生プロジェクトについて、全体の38%の学生が認知しているが、約半数の学生は学生プロジェクトについて「知らない」と回答しており、学生への周知方法を工夫する必要がある。

また、学生プロジェクトに採択された団体の満足度・充実度については、約半数以上の学生が充実していると感じているが、更に満足度を高めていく必要性を感じる。

認知度



満足度・充実度



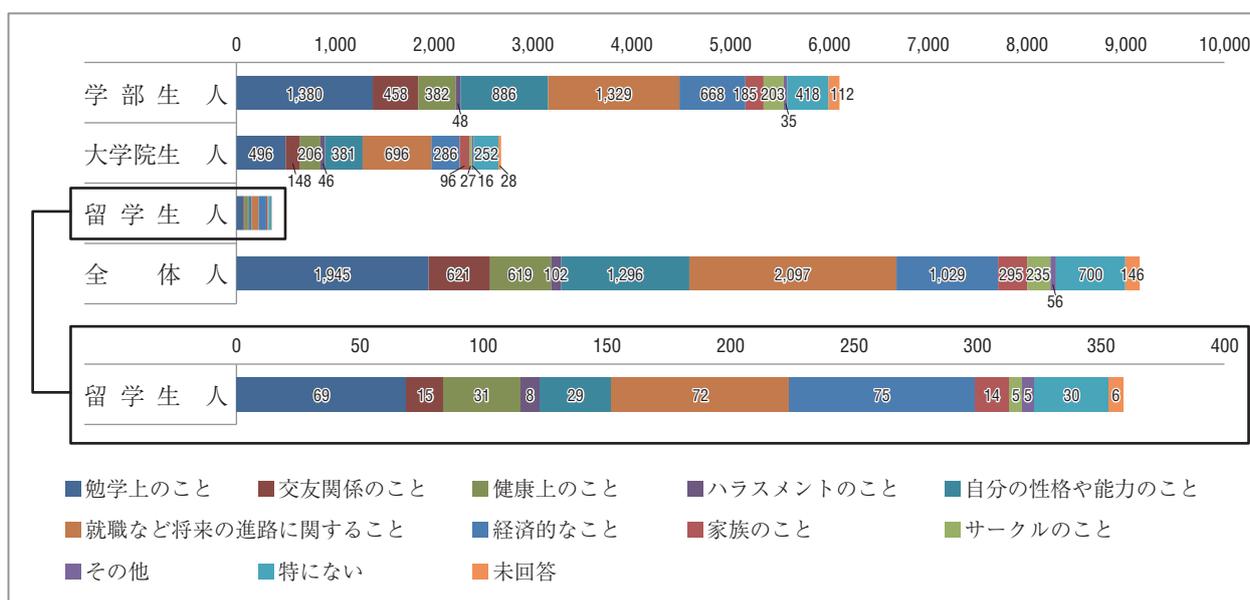
K. 悩み、健康等

■悩みについて

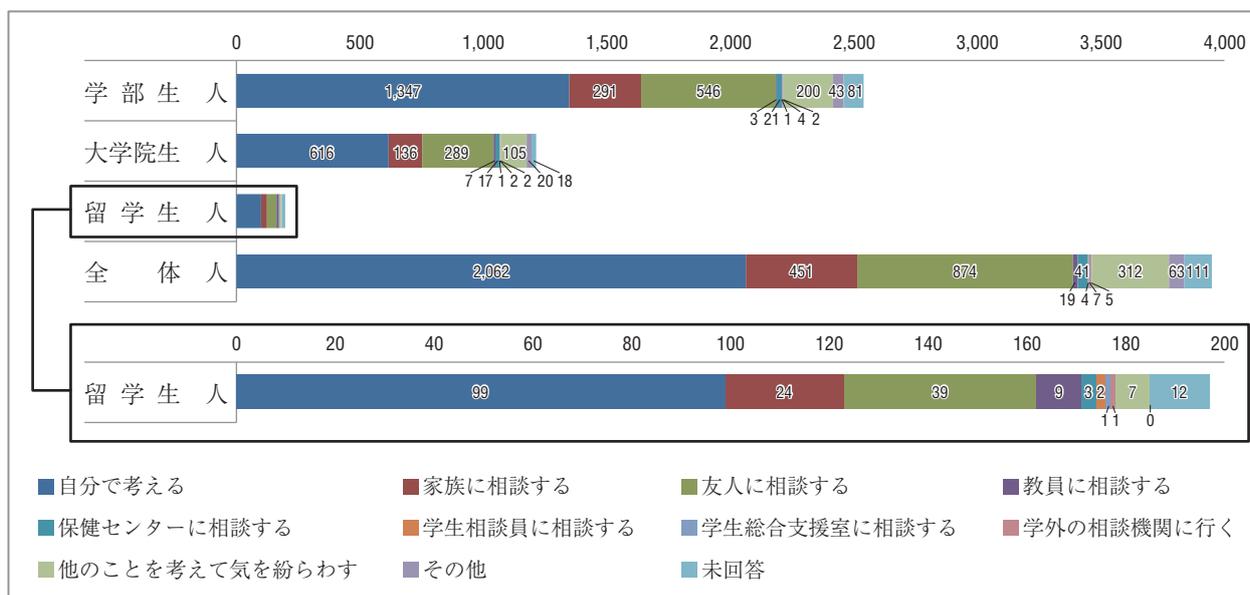
何らかの悩みがあるが、まずは自分で解決を図る学生が多い

何らかの悩みを抱えている学生が多数いることが分かる。日本人学生の悩みの種類については、「就職など将来の進路に関すること」、「勉強上のこと」、「自分の性格や能力のこと」が上位を占めている。留学生では、「経済的なこと」、「就職など将来の進路に関すること」、「勉強上のこと」が上位を占めており、留学生に経済的な悩みが多いことが分かる。悩みの対処法としては、「自分で考える」が圧倒的に多く、まずは自分で解決する努力をする学生が多いことが分かる。続いて、「友人に相談する」、「家族に相談する」となっており、学内の相談窓口への相談が少ないことが分かる。これは留学生にも同じ傾向であることが分かる。

悩みの種類



悩みの対処法

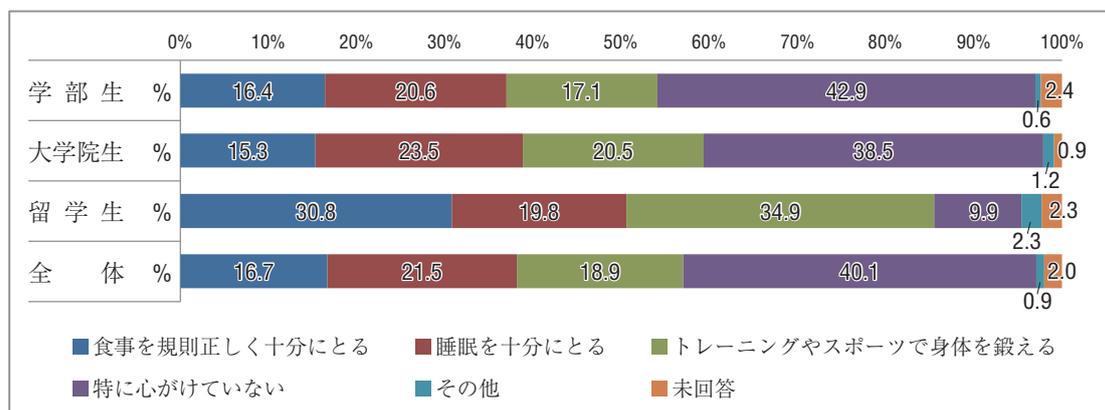


■健康について

半数の学生は何らかの方法で健康に留意している

全体の57%が何らかの方法で健康に心がけている。日本人学生は同じような傾向であるが、留学生に関しては、86%の学生が何らかの方法で健康に心がけており非常に特徴的である。日本人学生は「睡眠を十分にとる」ことが多くを占めるが、留学生は「トレーニングやスポーツで身体を鍛える」ことが多くを占め、差異がみられる。

健康について



■学生相談について

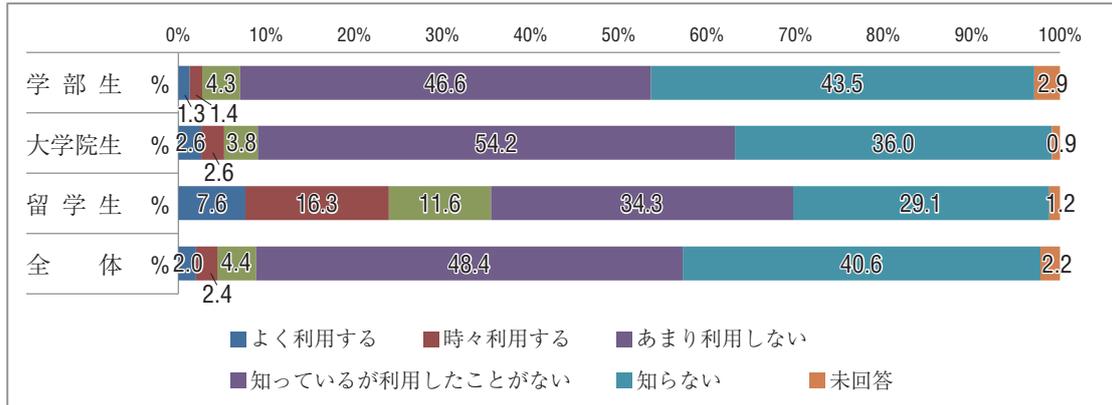
相談体制窓口の周知の必要性を感じる

学生相談員制度については、約60%の学生は認知しているものの、約40%の学生は「知らない」と回答していることから、さらなる周知が必要である。日本人学生では約48%の学生が「知っているが利用したことがない」と回答しており、悩みがあってもまずは自分で解決を図ろうとする学生が多数を占めていることから学生相談員制度を利用していないと思われる。しかし、学生相談員を利用している留学生の割合は日本人学生の割合の3倍(24%)と高いことが分かる。学生相談員を必要と感じている割合については、学生相談員制度をよく利用する留学生では83%と高く、あまり利用しない日本人学生でも、約半数となっていることが分かる。学生区分に依らず約60%が満足している。

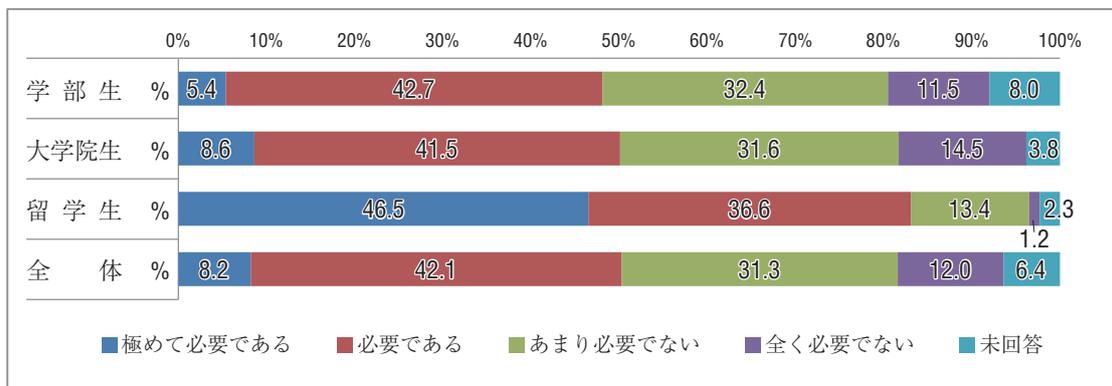
保健センターでのカウンセリング等の相談体制については、「知っている」学生が全体で68%おり、認知度は高いことが分かる。

学生総合支援室については「知らない」と回答した学生が全体で63%おり、さらに周知する必要があることが分かる。また、実際に利用したことがある学生も全体で6%であるが、その中でも留学生は22%の学生が利用したことがあり、留学生の方が学内相談体制を上手く活用していることが分かる。

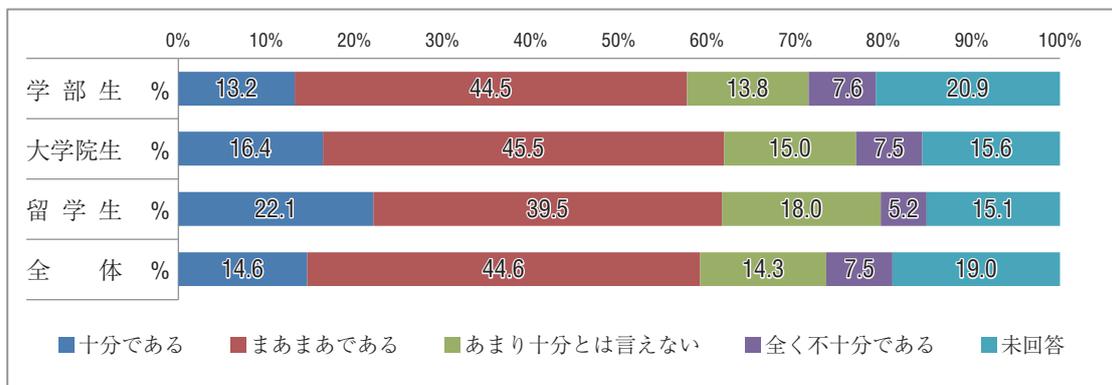
学生相談員利用の頻度



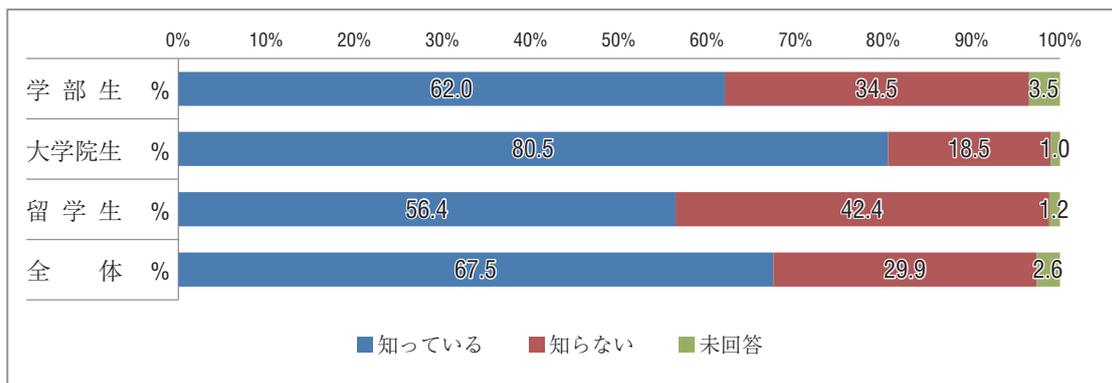
学生相談員の必要性



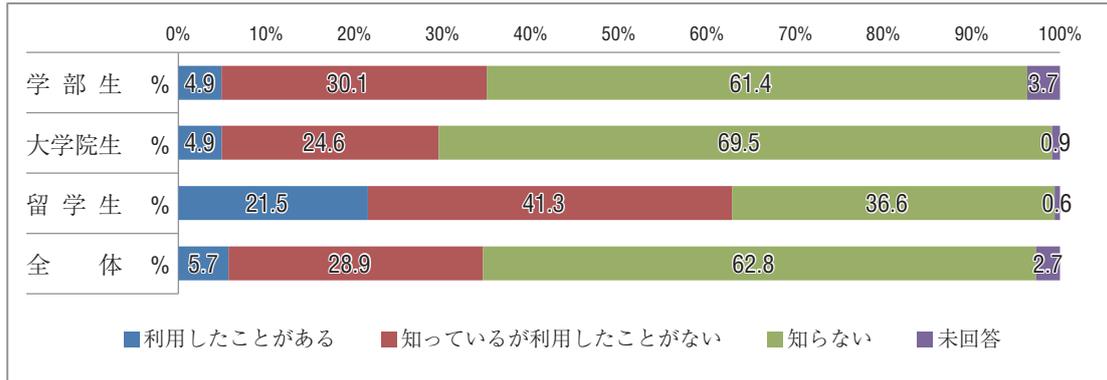
学生相談員への満足度・充実度



保健センターでカウンセリング等の相談ができることを知っているか



学生総合支援室を利用したことがあるか



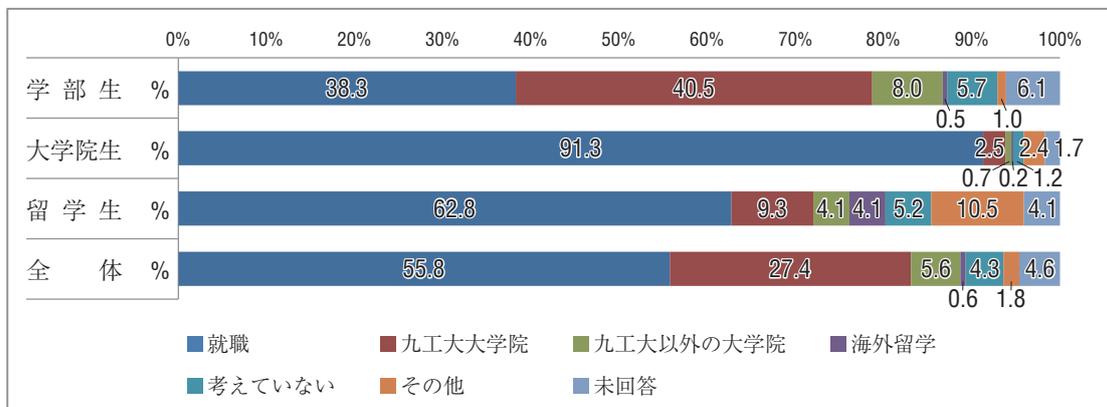
L. 進路、就職支援

■進路について

進路に不安を抱く学生はいるが、先輩・知人、指導教員からの情報を参考にする学生が多い

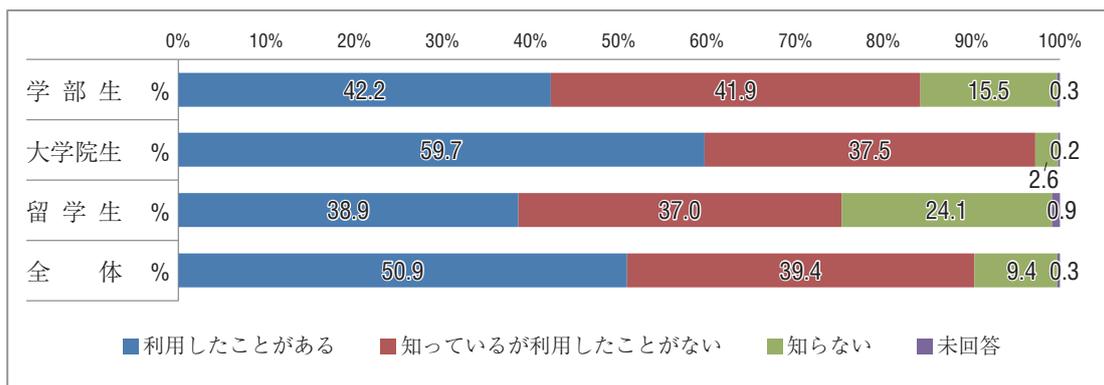
卒業後の進路について、学部生においては約半数の学生が大学院進学（他大学含む）となっており、就職希望者を上回っている。大学院生になると、91%の学生が就職希望となっている。留学生は63%が就職希望、13%が大学院進学となっており、学部生と大学院生及び留学生とでは進路の選択に違いがあることが分かる。

卒業後の進路



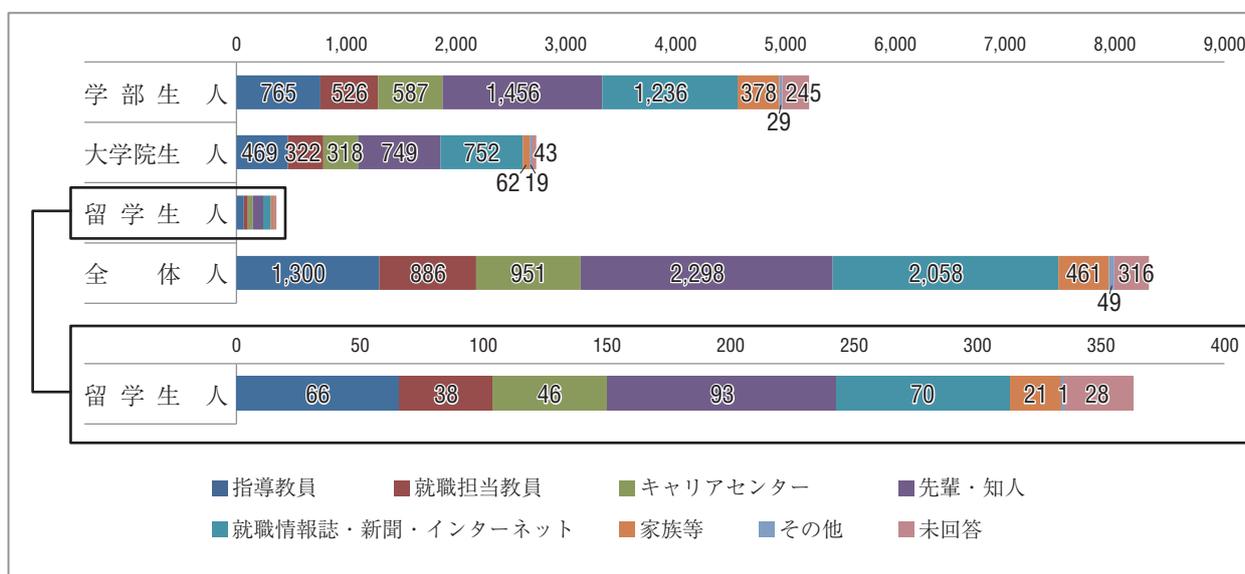
キャリアセンターについては約90%が知っており認知度は非常に高いことが分かる。ただし、留学生では、キャリアセンターの存在を知らない割合が日本人学生よりも高かった。また実際に利用したことがある学生の割合は大学院生の方が学部生よりも多く、平成24年調査時よりも10%多く、広く認知されていることが分かる。

キャリアセンターの認知度



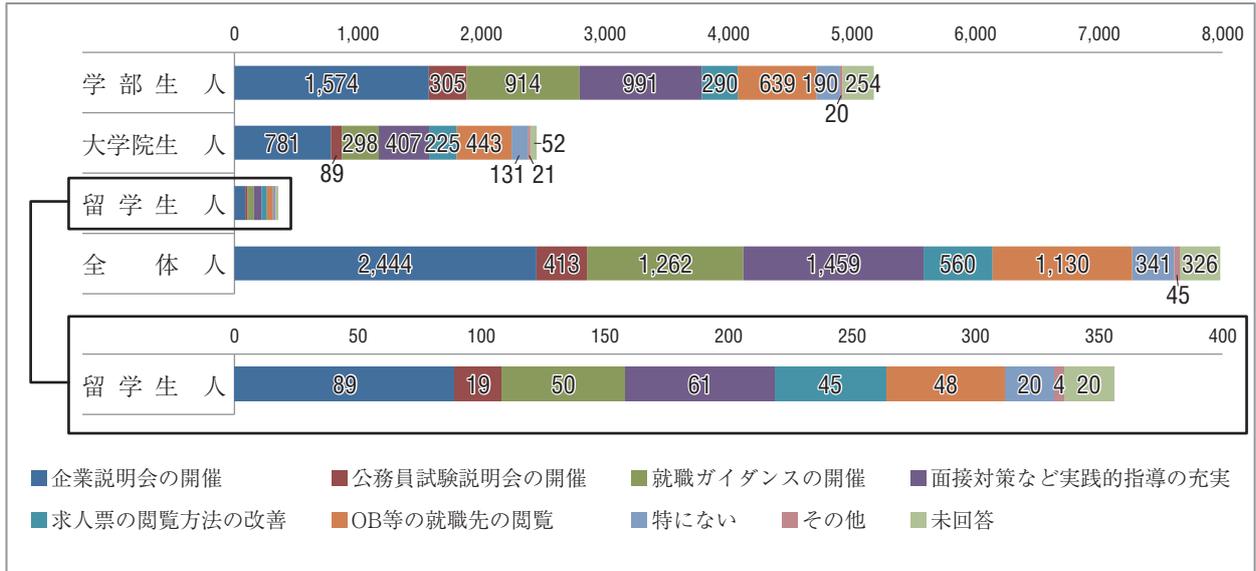
進路選択の情報入手手段としては、「先輩・知人」が最も多く、続いて「就職情報誌・新聞・インターネット」、「指導教員」、「キャリアセンター」、「就職担当教員」となっている。

情報入手手段



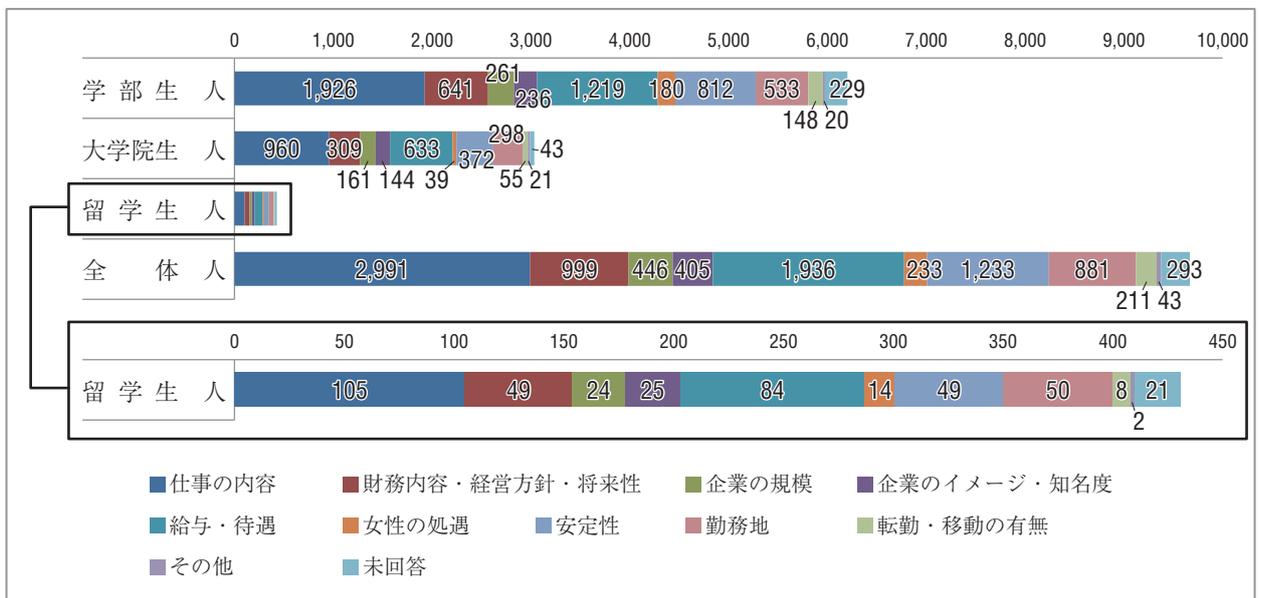
就職支援に関し大学に希望するものとしては、「企業説明会の開催」が最も多く、続いて「面接対策など実践的指導の充実」、「就職ガイダンスの開催」、「OB等の就職先の閲覧」となっており、前回調査時と同じ傾向となっている。

大学に希望するもの



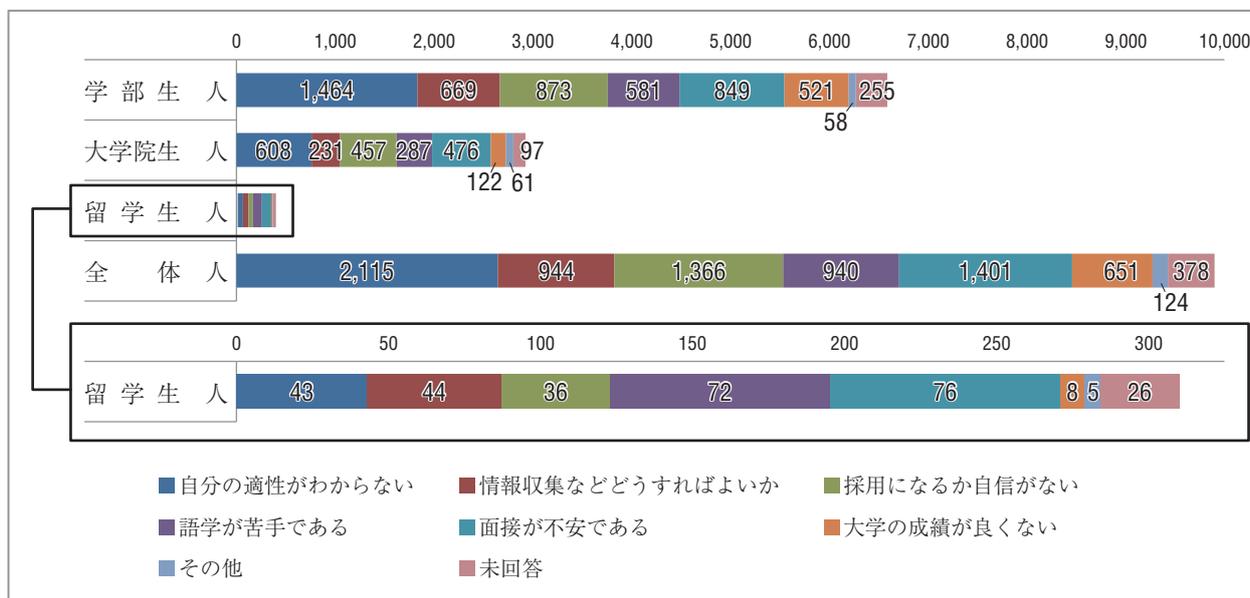
重視する項目

就職する場合に重視する項目としては、「仕事の内容」が最も多く、続いて「給与・待遇」、「安定性」、「財務内容・経営方針・将来性」、「勤務地」となっている。前回調査時には、「仕事の内容」、「財務内容・経営方針・将来性」、「女性の処遇」、「勤務地」、「企業の規模」の順であり、今回は「給与・待遇」、「安定性」が増え、「女性の処遇」、「企業の規模」が減っているといった変化がみられた。



不安要素

就職に関しての不安要素として、「自分の適性がわからない」をあげている学生が最も多く、続いて「面接が不安である」、「採用になるか自信がない」となっており、前回調査時同様の傾向である。留学生では、「面接が不安である」、「語学が苦手である」、「情報収集などどうすればよいか」の順であり、日本人学生とは異なる傾向を示した。

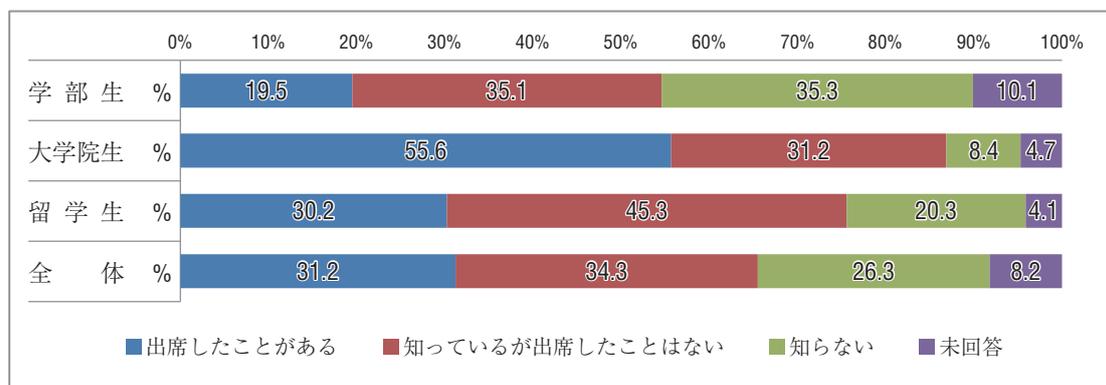


就職支援について

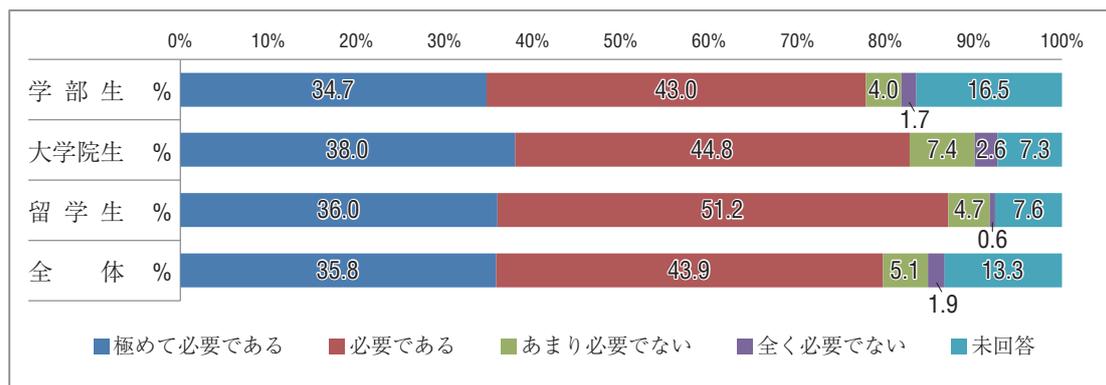
就職セミナーの認知度、満足度は高い

学部生の55%は就職セミナーを認知しており、出席は20%である。就職セミナーの学部での主対象が3年であることを考慮すると高い割合であるといえる。また、大学院生では87%が認知しており、56%の学生が「出席したことがある」と回答しており、大学院終了後に就職を希望する学生が多いことから、積極性がうかがえる。セミナーを必要性と感じる学生の割合は学生区分に依らず約80%と高いことがわかる。また、開催している就職セミナーに関しては、約70%の学生が満足しており、充実度が高いことが分かる。

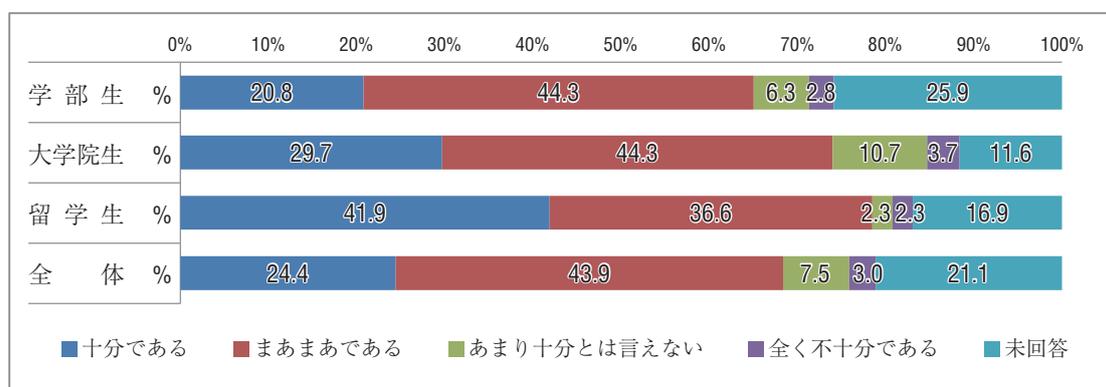
就職セミナー利用頻度



就職セミナーの必要性



就職セミナーの満足度・充実度



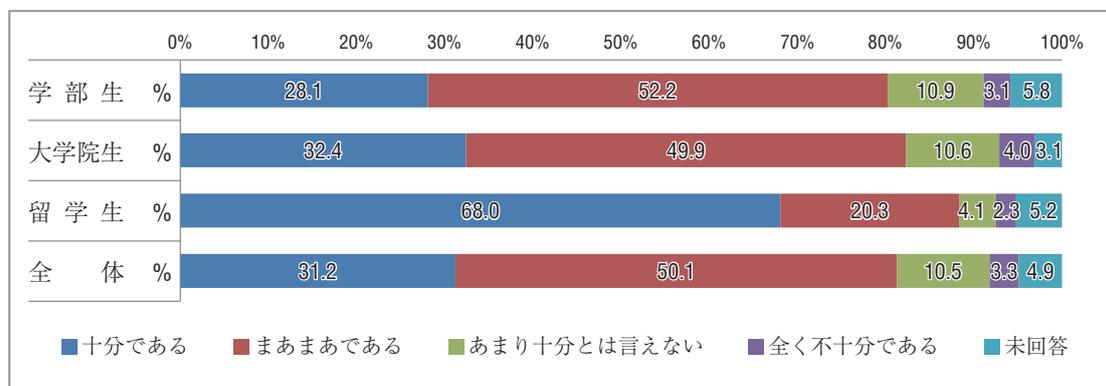
M. 危機管理支援

■キャンパス内での安全対策について

安全対策については高評価

全体の82%の学生が安全対策に満足しており、高い評価をしている。日本人学生に比べると留学生の満足度は非常に高いことが分かる。全体的にキャンパス内での安全対策には高評価をしている。

満足度・充実度



N. おわりに

調査の最後に、学生の皆さんに大学に対する要望や意見を求めたところ、非常に多くの要望等をいただきました。

学部生では、授業に関する意見や教室・実験等の教学関係施設の環境改善を求める要望が多くありました。学部生・大学院生共通して、食堂の混雑等、学生食堂・福利厚生等に対する意見が多く見受けられました。学生生活全般に対する意見では、全学的に駐輪場や駐車場の増設、整備等が求められていると分かりました。

この意見等を参考に修学支援、福利厚生や課外活動等への支援、環境の改善を図っていきたいと思います。